

# 魔法少女育成計画 electric

怠惰のブルーコ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

失った記憶を取り戻したオリ主が、魔法少女になって色々原作ブレイクしていく話。  
超超不定期更新。

とりあえず暫くは原作沿いで進めるつもりです。

作者が読んでて生き残ってほしいキャラは生き残らせません。可能な限り。

拙い文章なので、気になった事があれば遠慮せずご指摘下さい。

理解力の無さにも自信があるので、何か原作との相違、間違っているところがあれば、こちらも遠慮せずご指摘下さい。

# 目次

無印	91
プロローグ	80
第一話	72
第二話	57
第三話	41
第四話	32
第五話	22
第六話	14
ライデン 設定	7
第七話	1
第八話	

第九話



# プロローグ

何か楽しいことがしたかった。

らやまおうか  
雷山桜華は独りだ。

25歳になるという時に、原因不明の記憶喪失にあってしまった桜華は、記憶を失う前の自分を知り驚いた。

桜華は住所不定無職で知り合いと呼べる者も一人もいなかった。家族は全員他界しており、まさに天涯孤独の状態である。

財産だけは何故か莫大にあるため、生きていくのに不自由なことは無いのだが、そんな人生の何が楽しいのだろうか。

だから、何か楽しいことがしたかった。どんなものでもいいから、自分の暮らしを充実させたい、そんな思いで様々なことを試した。が、どれも長くは続かなかった。

無意味に過ぎていく、灰色の景色。

自分は一生こうして生きていくのだろうか。

それはとても嫌だ。

今までの自分がどうだったかは知らないが、これからは人生を楽しく生きたい。

自分の中にそんな想いが強くあった。

桜華は気持ちを切り替えるべく、手始めに引越しをする事にした。  
引越し先は、N市という場所だ。引越すアパートを決めて、桜華は荷物をまとめだした。

—————

☆森の音楽家クラムベリー

次の試験会場を決めた。N市という場所だが、これまでにないほど強力な魔法少女が生まれそうだ。

何の根拠もないが、クラムベリーにはそんな予感がした。

「今回は、流行りのソーシャルゲームを使って候補者を集めるぼん」

「ソーシャルゲーム、ですか。私もそれをする必要はないのですよね？」

「プレイヤーからファヴが候補者を見つげるためのものだから、それは必要ないぼん」

「そうですか。……N市には本当に魔法少女はいないのですよね？」

「いるわけないぼん。そんな確認をファヴが怠るわけないぼん。一体どうしたぼん？」

「いえ、それならいいのです」

何故だろう。N市には強大な魔力を感じる。

別に見た訳でも無いのにN市の候補者に自分が過大に期待しているような気がする。

ソーシャルゲームという全く新しい媒体で候補者を集めるからだろうか？

恐らくそれは関係ないだろうが、何故かワクワクしている自分があることに、クラムベリーは自然と微笑んでいた。

—————

引越しは完了して、さて何かを始めようと思った時に、ふと自分のスマホを見た。

桜華は元々ゲームなどはしていないが（もちろん記憶喪失の前のは分らないが）、広告で出てきた『魔法少女育成計画』というアプリには不思議と目が釣られた。

そういうえば街中でたまに魔法少女という単語を聞く度に反応してしまっていた気がする。

過去の自分は捨てようと思ったのだが、魔法少女が好きだということ捨ててのには強い抵抗があった。

どうやら自分は、魔法少女のことが好きだったらしい。

せつかくなので桜華もアプリを入れてみることにした。

そうして初めてみると案外面白いもので、ついそれに没頭してしまう。

そのせいで無意味に1日を過ごしてしまっただが、不思議と悪い気はしなかった。

それから桜華は1日の大半を魔法少女育成計画に費やし、仕事や学校に時間を取られないことが幸いしたのか、かなりの高ランクになることが出来た。

そしてゲームを始めて3日目。

そろそろゲームばかりするのも辞めようかと思いだした頃。

「おめでとうぼん！あなたは本物の魔法少女に選ばれましたぼん」

—————

### ☆ライデン

唐突に画面の映像が3Dになった。否、実際に飛び出した。桜華は5秒ほど固まった後、ゲームのやりすぎだと感じて布団に入った。すると、

「ちよつと、どうしたぼん？もしかして夢かなにかだと思ってるぼん？違うぼん、これは現実だぼん。寝られたら困るぼん」

おかしい。ぼんぼんうるさいあれが幻聴でないのならあれが言っていることは本当だということだが。

「えつと？……マジで言ってるの？」



「マジだぼん」

「マジカー」

魔法少女になれる。意味がわからない状況なのに、桜華はそれが分かっただけで嬉しかった。

だが桜華はまだ気づいていない。

「鏡を見るぼん」

言われた通りに鏡を見ると、そこには、本物の魔法少女がいた。

最初にファヴが飛び出してきた時から、既に桜華は魔法少女に変身していたのだ。

だが、そんなことはどうでもいい。

変身した自分の姿は、ゲームでのアバターだった「ライデン」となっていた。

ライデンは雷神や、雷様をイメージした見た目になっている。

頭には二本の角があり、服は黄色と黒色の虎柄のビキニに雲のような白いスカートを履いている。更に白い羽衣を身につけており、なんとと言っても目立つのは背後に浮かぶ四つの太鼓だ。

ゲームで見慣れたその姿は、自分が変身して眺めると、何か懐かしいものを感じた。何故かはわからないが、どうやらこの姿になること自体を懐かしんでいる気もする。

気のせいだと言うには強過ぎる懐かしさに、脳がチリチリした感覚に襲われる。

次々と自分の頭の中に入ってくる映像を観て、これが自分の失った記憶だと理解したのは、もう少し後のことになる。

## 無印

## 第一話

☆森の音楽家クラムベリー

木々が生い茂る森の中にひっそりと建つ小屋に、薔薇が絡みついている魔法少女、森の音楽家クラムベリーはいた。

魔法少女育成計画というソーシャルゲームを使って、試験に参加する少女を探し始めて4日経つ。

そろそろ一人目が見つかってもいいんじゃないか、と思っていたその時、彼女の持つ魔法の端末が反応した。

待ちわびたファヴからの連絡だ。

「クラムベリー、ちよつと想定外の事態が起きたぼん」

「想定外の事態、ですか。そろそろ一人目が見つかる頃かと思つたのですが……」

想定外の事態ということは、少なくとも参加者が決まったわけではないだろう。

そう思っていたが、

「いや、見つかったのは見つかったよ？でもそれが問題なんだぼん」

「…どういふことですか？」

「実は…いや、直接会った方が早いぼん。今呼び出したからちよつとだけ待つて欲しいぼん」

よくわからないが、フアヴも状況をよく理解していないように見える。とりあえずその問題の人物を待つこととした。

数分後、コンコン、と小屋の扉がノックされた。扉を向くクラムベリーにはうつすらと笑みがうかんでいた。

彼女は音に対して鋭敏な知覚能力を持っている。その彼女は聞いた。おおよそ普通の魔法少女が出せるはずのないスピードで向かってきた何者かが扉の前で止まったことを。

いくら魔法少女でも、あのスピードで走ることでできる脚力を持つ者は稀だ。確かな期待を感じながら、クラムベリーは窓に向かつて声をかけた。扉の向こうにいた魔法少女は、いつの間にか窓の傍に移動していたのだ。もつとも、クラムベリーはその音にも気づいていたが。

「申し訳ありませんが、扉から入ってきて頂けませんか？」

「…いやー、やっぱりバレてたか。さすがクラムベリー」

ところが、窓の向こうから返ってきた声を聞いたクラムベリーは、顔色を変えて窓を

開けた。そしてそこに立つ人影を視界に捉えると、信じられないような表情をしながら、ゆつくりと首を振った。

「…有り得ない。貴女が何故ここに」

「さあ？何でかなー？」

クラムベリーの目の前に立った彼女は、悪戯が成功した子供の様な顔をしていた。

—————

☆カラミティ・メアリ

気に食わない。

現在のカラミティ・メアリは機嫌が悪い。

彼女が魔法少女になったのはつい先日だ。

今日は先輩魔法少女とやらに会いに行かなければならぬらしい。仕事でも新人が先輩に挨拶をすることは当然の事だろう。

だが彼女にとってそんなものは関係ない。自分からわざわざ会いに行くということとは、自分が下手に出ているということだ。

カラミティ・メアリにとって、その行為は屈辱だった。

こちらは会いたくもないのに、わざわざ会いに行かなければならないなんて、（カラミティ・メアリにとつての）常識的に考えられない。

会ってみて、大したことのないやつだったらそのまま殺すつもりで、彼女は先輩の元に向かっている。

待ち合わせ場所は夜の公園。待ち時間に遅れて来たカラミティ・メア리를待っていたのは、角が生えて、虎柄のビキニを身につけた魔法少女だった。

自分の格好も中々アウトだと思っていたが、彼女を見る限り魔法少女はみんなそんなもんなのか、と一人頷いていると、先輩から話しかけてきた。

「待ち合わせ時間くらい守ってよー、後輩くーん」

この時点でほとんどキレかけていたカラミティ・メアリだったが、不思議とその先輩からはスキが感じられず、結局ただ立ち尽くすだけでいた。

「無視かよー。……よし、じゃあとりあえず自己紹介をしようか。

私の名前はライデン。貴女の名前は？」

「カラミティ・メアリだ。それでライデン先輩。早速だけど、お願いを一つ聞いてくれないかい？」

「メアリちゃんね。うん、いきなりだけど、先輩として受けられる範囲のものなら何でもー」

「死ね」

返事を言い終えるのを待たずに、カラミティ・メアリは腰から銃を抜くと、自分の『持っている武器をパワーアップできる』魔法で強化された銃でライデンを撃った。

さつきまで普通に会話してただけあって、かなりの至近距離だった。

当然被弾すると思われたが、その弾丸は空を切り、後ろにあつた滑り台を破壊しただけに留まった。

「ちよつと過激すぎやしないかな」

ライデンはいつの間にか、1歩、いや半歩程だけ右に移動していた。たったそれだけでカラミティ・メアリの近距離での奇襲を避けたのだ。

馬鹿にされたと感じたカラミティ・メアリは舌打ちを一つした後、後ろ下がろうとした。

だが、ここで彼女の体は止まる。

別に何かに驚いたとか、障害物があつた訳では無い。

だが、彼女の体は痙攣するだけで動こうとしない。

カラミティ・メアリはライデンを睨めつける。

これは恐らく、いや確実に、ライデンが何かしら魔法を使ったと考えて良いだろう。

だが、何をされたかは全く見当がつかない。

ライデンは無防備な彼女に近づくと、

「ハッハッハ。ほれほれー、動けない状態で他人に煽られて今どんな気持ち?」

「あ?」

精一杯の殺意を込めた視線を送るが、ライデンは何処吹く風で流している。

「とりあえず貴女がちよつとヤンチャで、私のこと嫌いなのはよくわかった。それはいいんだけど、先に言っておくね。揉め事を起こすのは好きにしていけど、それは自分の担当エリアをつくってからにしてね。そうしないと私がお仕置きに行っちゃうよ?」

口では軽く言っているが、彼女の目はカラミティ・メアリを冷たく見据えていた。

「そしてここは私の担当エリア。今日はメアリちゃんとの教育係を受け持ったから呼んだけど、今後は勝手に入って来て欲しくないかなって」

「……ふん」

「ん、じゃあ人助け頑張るようだね。人を助けるとマジカルキャンディーの数が増えていくから、まあ励みにでもしてね」

「……で?」

「で?って言われても。これで説明は終わり。いや、厳密にはもつとあるんだけど、正直あんまり意味なさそうだしねー」

「あ、そう。で、さっきの?はこれをいつ解いてくれるんだい?っていう問いかけだつ



ただけど」

「ああ。それなら大丈夫。後五分位で解けるよー。よし、じゃあもう用は済んだから。人助け頑張つてねー。バイバーイ」

そう勝手に言うのと、ライデンはカラミティ・メアリに向けて手を振りながらその場を去っていく。

どうにかその背中に鉛玉をぶち込もうとするが、やはり体は動かず、とうとう彼女の背中は見えなくなってしまった。

約五分後、ようやく体が動くようになったにも関わらず、カラミティ・メアリはじつとその場に立っていた。

次の日、その公園は原型を留めていないほど、破壊し尽くされていた。

## 第二話

☆ラ・ピュセル

魔法少女になってかなり経った。

最近、スノーホワイトと一緒に人助けを行うのが日課になってきている。嬉しいことだ。

そして今日は、ライデンという魔法少女から会いたいという誘いがあった。聞く限りだと、この街で2番目の魔法少女の様なので、ラ・ピュセルからもスノーホワイトからもかなりの先輩ということになる。

現在、失礼がないようしようとスノーホワイトと2人で話し合っているところだ。待ち合わせ場所はいつもの鉄塔。

するとライデンがやって来た。

「どうもー、はじめまして。ライデンです」

「あ、はじめまして。私はラ・ピュセルです。宜しくお願いします」

「は、はじめまして。スノーホワイトです。宜しく願います」

「よろしくねー。なんか2人も硬くない？緊張しないでいいんだよ？先輩とか後輩と

か気にしないし。ほら、タメ口でね？」

「そうです……そうか。じゃあよろしく、ライデン」

「うん。よろしくね」

よかった。

ライデンは親しみやすい人のようだ。

「2人はいつも一緒なの？もしかしてリアルで知り合いとかだったりして」

「あ、えっと……」

中々鋭いことを言うライデン。本人は冗談のつもりだったかもしれないが、スノーホワイトのその反応はほとんど肯定のようなものだ。それに気づいたのか、

「あらら。マジだったの？あくごめんごめん。別に詮索するつもりじゃなかったんだけど」

「いや、気にしてないし構わないよ。な、スノーホワイト」

「そうだねそうちゃ……ラ・ピュセル」

このタイミングで間違えるのかよ！と言いたい気持ちになったが、ライデンが気にしていないようなのでわざわざ指摘はしなかった。

「うん。それならいいんだけど。それにしても、ラ・ピュセルって……」

「ん？」

「なんか、エロいよね」

「え」

「いや、鎧の隙間からチラチラ見える地肌とかがなんか、妖しい感じがしてさ」

「そ、そうかな」

まさか男です、なんて言えるわけではないだろう。ラ・ピュセルには、恥ずかしそうにそう返事することしか出来なかった。

ちなみにスノーホワイトはライデンの言った鎧の隙間を見てしまい、顔を赤くしている。

「むー。スノーホワイトさつきからラ・ピュセルにデレデレしてない？」

「え!? そ、そんなことないよ」

「別にいいと思うよ? シスターナナとウィンタープリズンみたいなのもいるし」

「ち、違うよ! ラ・ピュセルとは、そんなんじや、ないし…」

「う…そ、そうだよ。私達は別に…」

「むふふー。2人とも可愛い反応しちやってー」

2人の反応を見てニヤニヤしだしたライデンが二人に抱きついた。

「ちよ! ライデン!?!」

「きゃー!」

「ふっふっふ。ラ・ピュセルいい体してるじゃないかー。スノーホワイトも抱き心地がいいねー」

「ちよ、やめて」

「良いではないかー良いではないかー」などのたまう彼女に、ラ・ピュセルはつい拳骨で反撃してしまった。

ゴチン！

という間の抜けた音の後、頭を抱えたライデンがその場で悶える。

「だ、大丈夫？」

その姿を見て衰れに思ってしまったスノーホワイトはライデンに言葉をかける。勿論、不用意には近づかない。

「うー、ごめんごめん。思ったより2人が可愛くて舞い上がってたんだよー」

「全く…」

後輩に抱きつき、反撃されて涙目になっている先輩をみて、ラ・ピュセルはため息をついた。

—————

その後は3人で人助けをすることになった。

普段複数人で行動することが無いライデンは、2人付いていくような形でいつ

たが、途中で急用が出来て、帰ることになった。

「ごめんねー。手伝おうと思ってたんだけど…」

「いいよ。楽しかったしね」

「うん。じゃあね、ライデン」

「うん、バイバーイ」

ライデンは空を飛びながら、見えなくなるまで手を振っていた。

「ライデンはいい人で良かったね」

「うん。もうちよつと怖いかと思ってた」

「ふーん。なんで？」

「えつと……カラミティ・メアリの教育係をやってたつて聞いたから」

「あー、そうだったね。でもあの人とは全然違った」

「また会いたいね」

「そうだね」

ラ・ピュセルとスノーホワイトはそう言いながら、人助けを再開しました。

—————

## ☆森の音楽家クラムベリー

「オツス、クラムベリー。2人に会ってきたよー」

「そうですか。それで？」

「ん、ラ・ピュセルは相手になりそうだったよ。ウインタープリズン程じゃあないけど」  
「なるほど。それではやはりウインタープリズンが…」

「んー。嫌かもしれないけどさ、カラミティ・メアリになりそうな気もしないでもないね」

「……あれは早急に潰しましょうか」

「いいんじゃないかな。正直私も苦手」

「後は17人目の魔法少女がどんな魔法を持っているか、ですな」

「まあゲームが始まったあとだし、魔法少女になるのを他の魔法少女に止められる、なんてハマをしなければ良いでしょ」

2人は森の例の小屋で密談をしている。

最近、ライデンは色々な魔法少女に会いに行っている。表向きは親睦を深めるため。

だが実際は、クラムベリーとある程度戦えそうな魔法少女を探すため。

コミュ力の高いライデンはクラムベリーに頼まれて、探す役目を担っている。

「あー何度も言うようだけど、私がお気に入りって言った魔法少女にはできるだけ手を

出さないでね？もしそんなことしたら……」

「分かっています。私のやつている事を魔法の国に連絡する、でしたよね。それが協力してもらう条件でしたし、そんなことをするつもりは無いですよ」

「ならいいけど。ちなみに今はたまちやんかな。あの娘可愛いよな」

「たまという魔法少女は弱い。私の興味を引く要素はありません」

「だよー。せいじゃ私はこれで。またねー」

「はい。それでは」

そうしてライデンは小屋を去っていった。

するとそれを見計らったように、クラムベリーの魔法の端末から電子妖精が現れた。

勿論、ファヴだ。

「クラムベリー、本当にあれを放っておくぼん？あれはその気になれば魔法の国に連絡できちゃうぼん。どう考えても危険だぼん」

ファヴは現在、かなり苛立っている。彼女はクラムベリーが試験という名目で殺し合いをしている事を知っている。そしてそれを魔法の国へ連絡する手段もある。

更にファヴを苛立たせる理由。それは、試験のことを教えたのは、他ならぬクラムベリーだということ。

「…そうですね。でしたらどうするのですか？マスター専用端末（マスター専用端末）を持っている彼女に襲



撃をかけるのですか？」

「それはそうだけど。じゃあなんでクラムベリーはあれに試験のことを教えたぼん？」  
「簡単です。彼女は強者です。全魔法少女の中でも、数えるほどしかいないほど。そんな人と戦えるチャンス逃すなど有り得ません」

「ファヴにその機能があれば、恐らく舌打ちでもしそうな状態だ。」

「それに」

クラムベリーは続ける。

「彼女は私よりも、遥かに強者です」

「そう言いながらクラムベリーは、妖しい笑顔を浮かべていた。」

## 第三話

☆スノーホワイト

重大発表がある。

ファヴからそう連絡が来たのはつい最近だ。

ラ・ピュセルと何度か話したが、結局何の事はさっぱり分からなかった。

そしてその発表の日。スノーホワイトはラ・ピュセルと一緒に、チャットの中でファヴからの発表を待っていた。

そして遂にファヴが現れたと思ったら、その発表は衝撃的な内容だった。

17人目の魔法少女が増えるのはまあいい。

問題は魔法少女を8人に減らすということだ。

ブーイングが飛び交ったがファヴは取り合ってくれず、これで話はおしまいとばかりに消えてしまった。

今から魔法少女を辞めるなんて、そんなのは嫌だった。

それは勿論皆同じだろう。

スノーホワイトは、これまでよりも更に気合を入れて人助けを行うことに決めた。

今日はラ・ピュセルとは一緒に居らず、1人だ。  
なんだか忙しかったらしい。

寂しい気持ちもあつたが、1人でもできるようになった方がいいだろう。  
と、その時、見覚えのある姿を視界の端に捉えた。

あれは……、

「ライデン?」

話しかけようとも思ったが、急いでいるのかどんどん遠ざかっていく。

別に追いかける理由も無く、人助けに戻るスノーホワイトだったが、確かライデンの  
向かった方向は……ルーラ達の縄張りだったはずだ。

何故だろうと考えるスノーホワイトだったが、結局答えは出ず、今度こそ人助けに  
戻った。

—————

☆スイムスイム

魔法少女を減らすことに決まってから、ルーラ一味も本腰を入れてマジカルキャン  
デーを集めることに決めた。

たまは相変わらず中々キャンディーが集まってないようだが、スイムスイムは自分でもそこそこ集められたと思っていた。

ただ、一番はルーラだった。

やっぱりルーラは凄い。スイムスイムの憧れるお姫様。自分はこんな凄いお姫様に仕えられて満足……だ。

？

満足な……はず……なのに。

何だろう。ルーラがお姫様で何がいけないのだろうか？

考えていると、頭が痛くなってきた。

このままルーラと一緒にいると、迷惑をかけてしまうかもしれない。

するとよりもよって、今夜スイムスイムに用があつたらしい。

大切な用事の様だったが、今日は体調不良ということで帰らせてもらった。

本当に申し訳ない。

しかし本当に、どうしてなのだろう。

「……何でだろう」

つい言葉に出てしまった。

すると、

「あれ？ルーラちゃん達と一緒にやないの？」

いつの間にか目の前には1人の魔法少女が立っていた。

「…あなたは？」

「えー。1回会ったことあるの覚えてない？ライデンですよ。貴女、スイムちゃんの前輩なんだからね？」

「…忘れてた。確かたまの事を気に入ってた人」

「その通り！はあ…たまちゃんかわゆ…。コホン、それでどうしたの？もう解散したの？」

「ううん。頭が痛いから先に帰らせてもらった」

「へえ。体調管理はしっかりねー。…もしかして何か悩みがあるの？さっき何か呟いてたし、お悩み相談なら任せてね？」

ニコニコしながら言うライデン。

馴れ馴れしい人だな。

段々ライデンの事を思い出してきたスイムスイムは、彼女に抱いた最初の印象を思い返した。

スイムスイムはライデンをイマイチ信用していなかったはずだ。

しかし、いつの間にか、ルーラがお姫様だということに自分が満足出来ていないこと

を、ライデンに話していた。

なぜ自分が話してしまったかは分からない。

だが、他人に話すことで多少は気分が楽になったように感じた。

「うーん。それってさ。自分もお姫様になりたい、みたいな気持ちなんじゃないの？」

「え……私が？」

「そそ。お姫様にお仕えするんじゃないかって、自分がお姫様になって誰かに仕えて欲しい、みたいな」

「私が、お姫様……」

思いもしなかった発想にスイムスイムは動揺が隠せなかった。

「あーっと。ちよっと他の魔法少女と会う約束してるから。またね、スイムちゃん」

「……うん」

そのままライデンはどこかへ行ってしまったが、スイムスイムはそれから、ずっとその事について考えていた。

—————

☆ルーラ

ライデンという魔法少女に、2人で会いたいと急に言われた。

今まで喋ったことも1度だけで、チャットでも、ほとんど見たことはなかった。

確か彼女のことを最初に知ったのは、カラミティ・メアリの教育係が誰なのか調べた時だ。

怪しい。

恐らく元々だろうが、万が一カラミティ・メアリをあんな風にしたのが彼女ならば、カラミティ・メアリ以上の危険人物であることになる。

細心の注意を払うために、ミナエルとユナエルにはいつでも奇襲をかけられる様に、隠れてもらった。

たまはどうせ役に立たないだろうから帰らせた。

スィムスィムにも声をかけたが、体調不良を理由に先に帰ってしまった。

役立たずめ。

そう考えていると、寺の戸がノックされた。

隠し部屋などがあるので、待ち合わせ場所はルーラ達の本拠地だ。

「どついで」

「お邪魔します。久しぶりー、ルーラちゃん。ご機嫌麗しゆうございます」

「そう。入っていいわよ」

遂に部屋に入ってきた。

それにしてもなんだその挨拶は。

全く腹の立つ。

「おー。中々立派な場所を本拠地にしてるねー。私もこういうの欲しいなー。なんか憧れるよね。秘密基地みたいで」

「あつそう。それで？今日は何の話があつてきたの？」

早く本題に入れ。

あと少しで舌打ちしてしまえそうだ。

ところが本題は、少々どころではないほどきな臭かった。

「そうそう。実は風の噂…じゃないけどあることが起こるって知ったから、ちよつと伝えとこうかなくて。内容なんだけど、死人が出ると思うから協力して欲しいの。ほら、マジカルキャンデイの足しにもなるし」

「…死人ですって？」

テロでも起こすのだろうか。

だが、そうだとどうやってそのことを知ったのだろうか。

「うん、死人。実はカラミティ・メアリが絡んでるんだけどさ、自分で人を襲って、怪我した人を生かすことで『困った人を助けた』ことにしてマジカルキャンデイを集めるつ



て」

「…それは本当なの？」

「勿論。でも証拠を出せと言われたら困っちゃうかなー」

にわかには信じ難い話だが、カラミティ・メアリが絡むなら有り得ない事ではないだろう。

しかし、如何せん信憑性が無さすぎる。

どうするべきか悩んでいると、

「いやー、ね？ 本当ならシスターナナの所とかに頼めばいいんだろうけどさ。ウインタープリズン強いし。でも個人的にシスターナナが苦手だね…」

「ああ、あの博愛主義者ね。私も嫌いよ」

特にカラミティ・メアリの縄張りに入つて無事で帰ってきたことを自慢するところが嫌いだ。

殺されればよかったのに。

「うんまあ苦手な理由はそうじゃないんだけど…。とにかく頼めそうな人で一番頼れるのが貴女達だったんだよ」

「へえ。…でもカラミティ・メアリと事を構えるんでしょ？ いや、ビビってる訳じゃないのよ？ ただ、あいつに私の魔法を使うためには近づかないといけないし。他の魔法少

女じゃダメージを与えるのは厳しそうだし……」

「まあ、確かにキツイかもしれないね。でもね、私が貴女達に頼みたいのは、倒すのを手伝えることじゃないんだよ」

「はあ？ どういうこと？」

言っている意味が分からない。何をさせるつもりなのだろう。

「えつとね、それは……」

「————」

「……ふーん。何でそんなことさせるのかは分からないけど、いいわよ別に。というか、メリットはあつてもデメリットは全く無い話だし。……本当に何でそんなこと頼むの？」

「それは企業秘密なのです！ まあ気にしてもいい事はないとだけ言っておこう。じゃあ私に報酬を絶対渡すよう魔法で命令してね。……先に言っておくけど、別のことを命令しようとしたら」

「そんな事しないわよ。じゃあそこに立って」

「ほい」

ライデンはルーラの目の前に立つ。

本当は『ルーラに有利になるように動きなさい』と命令しようと考えていたのだが、止めた。

警告されたからと言うのもあるが、別の理由の方が大きい。

ライデンは危険だ。

万が一にでも敵対すれば、徹底的に潰される気がしてならない。

今の作戦を話している間も、ふとした時にミナエルとユナエルが隠れている場所に目を向けていた。

その目は、カラミティ・メアリよりも危険さを感じ取れた。

やはり私の目は間違っていないかった。

とりあえず今は恩を売っておくに限る。

そう判断して、ルーラはライデンの命令に従った。

いつの間にか信憑性の無い情報を信じてしまっていることに気づかずに。

## 第四話

☆カラミティ・メアリ

彼女はその日、酒を楽しんでいた。

最近ではマジカルキャンディを集めるために色々していて、ゆっくりする機会が無く、久しぶりに飲んだ酒はうまかった。

だがそんな時、一人の男が急ぎながら部屋へ入ってきた。

久しぶりの酒を邪魔されて殺意が湧いたが、次の瞬間にはその殺意が別の人物に向けられていた。

「失礼します！先程入ってきた情報なのですが、近くに姐さんの言っていたライデンなる人物が確認された模様です！」

「あ？」

ライデン。彼女は今までの中で、最もカラミティ・メアリの侮辱した人物だろう。

初めてあつた時もさる事ながら、その後の事が最も腹立たしい。

あの日、カラミティ・メアリはライデンからの屈辱に怒りを抑えきれず、公演を原型を留めないほど破壊した。

彼女のテリトリーで。

その報復に次の日から3日間。ライデンはカラミティ・メアリに対して、陰湿としか思えない嫌がらせを始めた。

最初は些細なことだった。

ものに触る時にやたら静電気が起きたり、電球の調子がおかしくなったり。

その程度のことは、機嫌は悪くなるにしても運が悪いで片付けられた。

しかしそれらは段々エスコレートしていった。

まず、冷蔵庫やテレビなど電気製品が全て故障。

スマホに送られるチェーンメールなどの迷惑メール（何故メールアドレスを知っているのかは謎だが）。

終いには盗聴されて、意外に可愛い所もあるねと一言添えられて送られてきた、カラミティ・メアリの変身する時の言葉を録音したテープ。

あの時は本気で殴り込みに向かおうかと思った。

だが、彼女は何故か色々な魔法少女に会いに行っており、捕まらない。

そもそも彼女のテリトリーは知っていても、彼女の住んでいる場所は知らないのだから、分からないのは当然ではある。結果、それに対する報復は未だに出来ていない。

そんな矢先にカラミティ・メアリの縄張りに現れたライデン。

どんなつもりなのかは知らないが、これは仕留めるチャンスだ。

グラスに残っていた酒を飲み干すと、カラミティ・メアリはライデンを目撃した場所へ向かった。

—————

そこは廃ビルだった。

中を探そうと入口に立った彼女は、後ろの気配に気づき躊躇なくそちらへ発砲した。

しかし、まだだ。

また彼女は一步しか動かずに彼女の銃弾を避けた。

「ちよつと危ないじゃん。一般人にも被害が出ちゃうよ？」

「どうでもいい」

一言呟くと、また発砲するカラミティ・メアリ。

しかし、今度は少し動いただけのライデンに、一発だけ銃弾が当たった。

当たったはずだった。にも関わらず、ライデンは普段通りの笑顔を浮かべている。

有り得ない。

カラミティ・メアリによって強化された銃弾はビルのかべをも容易に破壊する。

それを受けて無傷でいられるはずが無い。

カラミティ・メアリはライデンを睨む。

ライデンの魔法を、初めて会った時のことから、相手の動きを止める魔法だと思っただけだが、違うのだろうか。

暫く動かないでいると、ライデンの方から話しかけてきた。

「いやー、やっぱりかー。体が鈍ってる。一発当たっちゃった。…魔法について知りたそうだねー。折角だし、土産として教えようかな」

「……」

ヒントが少なすぎる。

嘘を言うような雰囲気ではない。カラミティ・メアリは彼女の魔法についての推測を止めて、話をきくことにした。もちろん、銃口を向けながら。

すると彼女は虚空から棒のようなものを二本取り出す。

カラミティ・メアリはそれを訝しげに見つめた後、呟く。

「バチ……？」

「ピンポンピンポーン。私の魔法は、『四つの太鼓でそれぞれの魔法が使えるよ』っていうものでね？太鼓をバチで叩くとそれぞれの魔法を使えるのさー」

「…私に使った時はそんなことしてなかっただろ」

「いや、してたよ？会う前に」

「……チツ」

カラミティ・メアリはそこで発砲するが、魔法少女としてもかなり速いだらう速度で動いて躲すライデン。

そしてそのまま右上の太鼓を叩く。

「これがいつも展開してる一つ目の魔法。『見えない電気のバリアで色々なものを防ぐよ』っていうものなんだけど、1回限りの魔法でねー。どんなに強くても1回は防ぎけど、どんなに弱くても1回しか防げない。そんな魔法」

そう言うのと、次は左上の太鼓を叩く。

「これが二つ目。『魔法の電波で周りの様子を探るよ』。これはちよくちよく使つとくだけで不意打ちとか防げるから便利なんだぜー」

そして右下の太鼓を叩く。

「そしてこれが三つ目。『電気に魔法をかけて、自由自在に操るよ』これが本当に汎用性高くてねー。超便利。まあこれに頼りすぎているような感じは否めないけどね」

そう言うるとライデンは廃ビルに向けて手を出す。

そこからバチバチとした音が鳴ると同時に、強烈な光がカラミティ・メア리를襲った。そしてその直後にさらに強烈な音がする。

カラミティ・メアリが目を開けるとそこには、黒焦げになった廃ビルがあった。

「まあこんな所。どう？ 凄いでしょー」



えっへんと胸を張るライデンに対して、カラミティ・メアリは冷や汗を流していた。今の音と光からして、恐らく今ライデンは雷を出したのだろうが、そんなものを使われたらカラミティ・メアリに勝ち目はない。癩だが、今は一旦引いて…。

「そうそう。今日はメアリちゃんに先輩としてやつてもらわないといけなことがあつてね」

「……何」

「実はー」

「っ」

得体の知れない悪寒を感じ、答えるのを待たずに跳躍してビルに逃げるカラミティ・メアリ。

下を見ると、先程までいた場所にバチを叩きつけているライデンの姿がある。かなりの衝撃を受けているはずのバチは傷一つない。

「色々あつて貴女には消えてもらおうということになったんだけど、この先の戦闘を見据えて、三つ目の魔法を使わずに貴女を倒そうと思つてね。さつきもちよつと言つたけど、私は三つ目の魔法を頼りすぎているようだし。という訳で、私の魔法は冥土の土産として持ち帰つてねー」

するとビルに向かってくるライデン。やむを得ずビル内に潜伏するカラミティ・メア

り。

今彼女は激しい屈辱を感じているが、それと同じくらい恐怖を感じていた。卓越した身体能力。

自分を瞬殺できる三つ目の魔法。

そして、一つだけ明かしていない四つの魔法。

恐らく話せないレベルの切り札なのだろうが、三つ目であれだと言うのに、それ以上ものものを持つているのだとしたら、今のカラミティ・メアリでは到底勝てない。

今は逃走しながら、チャンスを待つしかない……。

「あのさあ」

声が聞こえた途端にカラミティ・メアリは蹴飛ばされる。

強烈な衝撃に襲われながら、そこら中に魔法の力を加えた銃を連射する。

「わざわざ貴女に魔法を教えたの、聞いてなかったの？」

それに対しライデンは、呆れたように語りかけながら銃弾を避けたり、バチで防ぐ。

カラミティ・メアリはそこら辺に地雷を投げ捨てながらライデンから逃げる。

しかし彼女の魔法は、無慈悲にもカラミティ・メアリの居場所を特定していた。

階段に逃げるカラミティ・メア리를、下から天井を突き破りながらライデンが襲う。

「かはっ」

叩きつけられるカラミティ・メアリ。

とんでもなく激しい痛みが襲ってきたが、今は逃げなければならない。

しかし右半身を捕まれ、また叩きつけられる。

銃口を向けながら逃げようとするが、何故か右腕が動かない。

魔法を使わないというのは嘘だったのかと絶望しかけるが、そうではない。

カラミティ・メアリは右肩から先が千切れていた。

悲鳴を上げようとするカラミティ・メア리를ボールのように蹴飛ばすライデン。

壁に叩きつけられ、動くこともできずにライデンを恐怖の眼差しで見つめる。

「じゃあこれで終わりね」

そこで彼女が近づいた時、天井が少しだけ崩れた。

ビルの倒壊を警戒し動きが止まるライデンに、崩れた小さなコンクリート落ちる。

小さいため大した防御を見せなかったライデンだが、そこで自分が全くダメージを

負っていないことに気づく。もちろん耐久力には自信があるが、ダメージどころか当

たつてすらいな様だ。そこで彼女は気づいた。

一つ目の魔法が作用したことに。

あのバリアはどんなに弱いダメージも一度しか防げない。

それに気づいたカラミティ・メアリは最後の反撃とばかりに手榴弾を投げる。

ライデンはバリアを新しく張るも、別のコンクリートが落ちてきてすぐに消えてしま  
う。

不味いと感じたライデンは急いでビルの外へと逃げるが、カラミティ・メアリの魔法  
が込められた手榴弾はそんな間も与えずに爆破した。

それは投げた本人も巻き込みながら、ビルを内部から破壊していく。

カラミティ・メアリはそれに巻き込まれながら意識を落とした。

## 第五話

### ☆リップル

一週間前、ファヴは魔法少女を半分に減らすと言っていた。

一番マジカルキャンデーが少ない人から順番に1人ずつ減っていくと。

そして今日。遂に脱落者が決定する日……だったのだが、結果は予想外なものだった。

まず、脱落者はカラミティ・メアリ。

あのカラミティ・メアリが脱落するとは予想していなかったが、嬉しい誤算だ。リップルは元々、あんな奴は魔法少女とは言えないと思っていたのだから。

しかし、どうやらマジカルキャンデーの数で決まった訳では無いらしい。

なんと、あのカラミティ・メアリが倒されたと言うのだ。

皆その事実を聞いて呆気に取られていた、否、そうでない者もいた。

そのカラミティ・メア리를倒した者達。

彼女達はカラミティ・メアリが一般人に危害を加えようとしていた所を発見し、それを止めに入ったと言う。

正直信じられない。

カラミティ・メアリを倒したこともそうだが、彼女が一般人が危害を加えるなど日常茶飯事。それを見て止めに入るなど、恐らく嘘に違いない。勿論そんなことは口には出さないが。

何か話せない理由があるのか。

そしてそこから推測される可能性を思い浮かべ、リップルは今日のチャットを欠席している彼女を思い浮かべる。

彼女とは関わりがほとんど無い。というか、会話自体したことが無い。

それでも彼女についてはそこそこ知っている。

理由は簡単。

とあるおしゃべりがよく話題にするからだ。

信憑性は微妙だがその情報によると彼女は、カラミティ・メアリを圧倒する程の実力を持った教育係で、この街の2番目の魔法少女らしい。

その彼女……ライデンは、おしゃべり……トップスピードの教育係でもあつたらしく、よく話題にされていた。

リップルが考えるもう一つの可能性。

それは、これをやったのは彼女達……ルーラー一派ではなく、ライデンなのではないか

?

勿論、なんの根拠もない。

ライデンと会ったことのない自分がこんなことを考えるのはおかしいだろう。

しかしどうしてもその可能性を捨てきれない自分がおり、リップルは今度ライデンに会うことを決めた。

—————

☆森の音楽家クラムベリー

「何故チャットに参加しなかったのですか？」

クラムベリーは、待ち合わせ時間より少し遅れて小屋の前にやって来たライデンを見つけると、開口一番にそう尋ねた。

彼女から話は聞いていたため、ルーラー派がライデンの功績を自分のものにしていくことにはなんの不満も無かった。

今回のカラミティ・メアリを落とそう作戦（ライデン命名）はクラムベリーとライデンの2人で考えたものだ。

この計画は、ルーラー派に交渉を持ちかけるところからスタートする。

内容は、今からカラミティ・メアリを潰しに行くけどルーラがやったってこととしてくれ、というもの。

何故こんなことをするのか。

正直こんなことは要らないんじゃないかとクラムベリーは思っていたが、ライデンは慎重だった。

自分が教育した魔法少女を倒したりすると、イメージが悪い。

今まで付けてきたイメージ像の明るくて親しみやすいライデンは、裏では容赦のない性格だと思われると警戒される。

だからその行動自体自分はやってないとするので、本性を隠しルーラ一派には功績を譲った恩ができる。

恐らく試験の間だけの関係だろうが、人数が多いグループに恩を売れるのは悪くない事だとライデンは主張し、結果このような、クラムベリーにとっては回りくどいといしか言いようの無い行動に出たのだ。

しかし、当のライデンがチャットを休むのはどうなのか。

少し頭の回るもので、カラミティ・メアリを知っている者なら気づいてもおかしくない。い。

そして気づいたものがライデンを疑い、そのライデンと何度も会っているクラムベ



リーをも疑えば、この試験自体が破綻しかねない。

クラムベリーの問いに非難するようなものを感じたライデンはどうどうと言うように両手を前に出す。

「まあまあ落ち着いて」

「ですが」

「話を聞いてつて。これはねー、私を疑える人がどれだけいるか探すためなんだよ。これで私のことを疑った魔法少女は警戒対象にして、そんなことを考えなかった人は私たちのことに気づくことは出来ない」

「…ほう」

「私の方でも一応目星は付けてるんだよ？多分だけど、リップルちゃん、ウインタープリンズン、マジカロイドちゃん辺りが気づくと思う。でも念には念を入れないとねー。これで私のことを疑い出した魔法少女が脱落するようにこちらで色々すれば、クラムベリーは純粋に戦闘を楽しめて、私は身が潔白のまま試験を合格できる。お互い利益しかないね」

「なるほど。きちんと考えていたのですか。それならいいのです。……ただ、貴女は合格できると言っていますが、きちんと私とは戦って頂きます。それを分かって言っているのですか？」

「うん」

自分のことを嘗めたような発言に、クラムベリーの目が細くなる。

次の瞬間、クラムベリーは吹き飛んでいた。

背中がぶつかつた木はすでに倒れている。

今クラムベリーはライデンを殴ろうとして、そのカウンターののように殴り返されて吹き飛ばされた。

「ふっふっふ。そんなんで私に攻撃しようなんざ百年早いよクラムベリー」

そう言いながらバチを取り出しいつでも戦闘できるように構えるライデン。

するとクラムベリーが倒れた木から起き上がった。

「流石です。ライデン、貴女は今まで試験で会ってきた魔法少女の中でも飛び抜けて強い。試験の最後まで取っておくつもりだったのですが、今やっても構いませんね？」

「別にいいよ。…ファヴは嫌がりそうだけど」

「どうでもいいです。では始めましょう？」

そう言った途端にクラムベリーは、目にも止まらぬ速さでライデンに向かっていく。

最初はお互い魔法は使わず（武器のバチは使う）、格闘戦の応酬だった。

リーチではバチのあるライデンが有利だが、ここは慣れているクラムベリーの方が一枚上手だった。

クラムベリーは右手でライデンを殴ると、ライデンはそれをサイドステップで右に躲し、左脚の回し蹴りで反撃する。それを後ろに下がりながら受け止め、クラムベリーはライデンを転ばす。

転びながらも受け取り、ライデンは体制を整えるために下がった。

が、それを許すクラムベリーではない。

彼女はそれを追いかけながらライデンの足を踏みつけた。

普通なら間違いなく骨が折れていたであろうライデンの脚は、小さな傷こそ付けられなくても大きな怪我はしなかった。

そのまま脚を振り上げて反撃しながらライデンは起き上がる。

振り上げられた脚を避けながらもクラムベリーは攻めるのを止めなかった。

クラムベリーが果敢に攻撃してライデンを追い込んでいると、遂にライデンが太鼓を叩いた。

「どうやら私はかなり鈍ってたようだけど、もうお遊びはおしまいだよー。クラムベリー。今止めるのなら魔法を使うのを一旦止めて、試験最後の1人になるまで待つてあげるけど」

「笑わせないでください。怖気付いたのですか？魔王の好敵手であった貴女が。私にも教えて貰えなかった四つ目の力、見せてくれるのでしょうか？」

「ふーん。……後悔して知らないからね？」

そう言い左下の最後の太鼓を叩くライデン。

すると彼女の体がバチバチと電気を帯びだす。

いや、帯びるといふより内側から溢れ出るように電気が音を立ててライデンの体にゆつくりとまとわりつく。

クラムベリーは最初それを見ていたが、

「少し準備が遅すぎますよ」

そう言うのと不意にライデンに掌を向け、次の瞬間爆音が鳴り響く。クラムベリーの魔法による破壊音波だった。

周りの木々は倒されて小屋も音を立てて崩れた。

地面もライデンが立っていた場所を中心に、クレーターののように抉られている。

先程まで格闘戦をしていたライデンはクラムベリーとの距離が近かった。それに加えて音という性質上、この攻撃を回避するのは非常に困難だった。

そして至近距離から銃弾を回避するライデンでも、その時は回避できなかった。

しかし、その時ライデンを見ていたクラムベリーは違和感しかなかった。

ライデンは最初から回避しようとしなかったのだ。

周りの様子から分かるよう、この攻撃をモロにくらえばさしものライデンでも無事で

は済まない。

だが、その予想は裏切られる。

「……一つ聞いてもよろしいですか？」

「んー？何かな？」

「…何故貴女は、そこに立っているのですか」

「哲学かな？…それとも、クラムベリーは私に倒れて欲しかったのかな？…こんな風に」

ライデンはクラムベリーの問いに、平然と、何事も無かったかのように受け答えすると、その場に仰向けに転がった。

戦闘中にこんなことをするということは、もう完全に、完璧に、クラムベリーをバカにしてるのだろう。

珍しく青筋をたてながら、クラムベリーは破壊音波を何重にも重ねて打ち出す。

確か一の魔法は一度だけどんな攻撃も防ぐ魔法だったはず。

もしさつき防がれたのがそれによるものならば、複数の攻撃をほぼ同時に与えれば突破できる。

しかし今度も結果は同じ。

仰向けでこちらを苛立たせる視線を送ってくるライデンは、またしても傷一つない。

ただバチバチと電撃が体を駆けずり回っているだけだ。

そもそも、さっきの攻撃を受けたあと太鼓を叩いていないということは、一の魔法ではないということだ。

「じゃあ反撃だね」

ライデンはそう言うとき上がりつつバチを取り出し、クラムベリーの元へ全速力で飛んできた。

動きの速さに関して、クラムベリーはライデンにはまず適わない。

避けることは無理だろうが、そんなことをする必要は無い。クラムベリーは先程から繰り出していた破壊音波を最大火力でライデンに向ける。

クラムベリーはずつと破壊音波の攻撃を止めずに続けていたのだった。

ライデンは相変わらず無傷だが、目的は攻撃ではない。反動でクラムベリーはライデンとは反対方向に飛んでいく。

何とか着地すると、辺りは元々木など無かったかのように荒野の様になっていた。

先程の全力のクラムベリーの攻撃のせいだろう。

また、クラムベリーも無傷ではない。

あんな威力の音波の反動を受けて飛ばせば、その速さは音速に匹敵する。そうなればそんな速さで飛ばされたクラムベリーの体は傷だらけになるのも道理だろう。

傷を確認しながらライデンがいた方向を見ようとすると、まるで

雷でも落ちたような音が後ろに鳴り響いた。

咄嗟に前に行こうとするも、急に全身が痺れたかと思うとクラムベリーは膝をついた。

おかしなことに、脚が動かない。

その事に気づき、クラムベリーは先ほどと同じように破壊音波の反動で逃げようとした。

が、ここでさらにおかしなことに気づく。自分が今何をしようとしていたか分からなくなつたのだ。すると段々頭が働かなくなつていった。

モタモタしている内に息も苦しくなってきた。

また、自分が誰と戦っていたのかが曖昧になつてくる。

思考がぼうつとしだし、彼女は何か衝撃を感じた、気がした。

音だけだ。

彼女の魔法のお陰か、音だけは鮮明に聞こえる。

今、彼女のぼんやりとしていた視界が動いている。

何かが土を転がっている音が聞こえる。

必死に動こうとするが、もはや触覚すら怪しくなり、自分の体が動けないのか、動いているのに気づいていないのか分からない。

と、ここで視界が暗転した。  
何もわからない。

もう考える事が出来なくなっているクラムベリーは、ゆっくりと思考を落としていった。

—————

☆ライデン

つまらない。

結局クラムベリーと戦ったライデンの、最後の感想はそれだった。

彼女の四つ目の魔法、『自分が雷になる』は正直自分で使っていて狡いと思う。

まず、雷という時点であらゆる攻撃は効かない。物理攻撃でなくても、かのアニメが大ヒットした有名な魔法少女の必殺ビームだって効かない。そして勿論、クラムベリーの音攻撃も効かない。

すべて通り抜けて行く。

次に、自身が移動する時に雷と同じ速度、即ち光速に匹敵する速度で移動できる。

目にも留まらぬ速さとはこの事で、激しい音を立てるものほとんど瞬間移動のよう



なことが出来る。

また、止まる場所は自由だが、障害物があれば強制的に止まり、それが自分自身を電気として帯びてしまう。生物なら大抵即死。非生物ならそこで留まって、また雷となつて光速で移動できる。

と言つても、ライデンも光速で移動しすぎると認識が追いつかず、周りが分からなくなつてしまうのであまり多用はできない。

そして、至近距離にいる人間に対しては、手足などの筋肉や脳など、様々な体の部位を麻痺させて機能を止められる。

クラムベリーに行つたのは正にそれで、一旦クラムベリーの背後に雷化して停止し、そこから彼女の脚を麻痺させて動きを止めて、脳を少しずつ麻痺させて魔法を使いにくくさせて、視覚、嗅覚と味覚、触覚を麻痺させた。

魔法のおかげで聴覚だけは最後まで残っていたようだが、それだけでは何も出来なかつた。

ライデンはため息をつく。

昔からこれだ。

彼女の魔法は理不尽で、相手の抵抗はまるで意味を為さない。

だから彼女はこの四の魔法をあまり使わないようにしている。

どうしても一方的になってしまふのだ。

クラムベリーのようには他人を巻き込もうとまでは思わないが、ライデンも自分を戦闘狂だとは自覚している。

戦うのなら、もつと手応えのある戦いがしたい。そのために、ごく稀にしか四の魔法は使わない。

要するに、四の魔法を使うと楽しくないのだ。

それとは別の理由も一応ある。

彼女の魔法は四つとも、自身が充電した電気を消費して使われる。

一から四にかけてその消費量は増えていき、四の消費量は他と比べてずば抜けている。

だが、慎重なライデンは常に四を2日ぶつ通して使える電気を充電している。

今回のようにあまり戦闘を長引かせずに倒せるのなら多少使っても問題は無い。

クラムベリーは既に変身が解けていたが、その体は真っ黒に焦げており、もはやどんな顔だったかなど分からない。

もしかしたら男だったのかもしれないと思いながら、彼女の懐からマスター用端末を取り出す。

そこから電子妖精が浮かび出す。

「…おめでとうぼん。貴女が次のマスターだぼん」

「んー。なんだか不満そうだねー。クラムベリーが良かった？」

「分かってて言うてるぼん？」

「先に言っておくけど、私はちゃんと聞いたからね？ファヴは嫌がるんじゃないって」

「…そうかい」

「あーぼん付けてない。本当にバグってんだね。電子妖精がこんなことするなんて」

「あんたがマスター用端末さえ持ってなければ消してたのに。クラムベリーめ。余計なことしやがって」

「私が魔法少女の試験を受けて合格したってことにして、2人で監督するってゴリ押しんだから凄いやね。そこまで私を助けてまで戦いたかったとは。まあ正直私の名前出せば行けるとは思うけど」

「…で、どうするつもりだ？あんたがゲームを続ける様には思えないんだけど」

「えー。当たり前じゃん。カラミティ・メアリを除いて、試験を受けてる子達はみんないい子だよ。ああいう子達に殺し合いさせるなんてちよつとナンセンスだよ」

「……そつちがその気ならこつちだつて実力行使に出るからな」

「ほう。やってみなよ」

「……」

ファヴは端末の中に戻ったかと思うと出てこなくなった。  
準備をしているのか。

待っている間に色々面倒くさくなってきたライデンは、とりあえず自宅のアパートへ  
戻ることにした。

## 第六話

☆スノーホワイト

今日、ファヴから急にチャットに来るように呼ばれた。

昨日カラミティ・メアリが脱落したばかりだというのに、一体どうしたのだろうか。

全員に届いているらしく、今は指定された時間まで2人で待っていた。

「何の集まりなのかな？」

「さあね。新しい魔法少女がそろそろ来るはずだし、その事についてかもしれないね。

……つと、時間だ」

すると、チャットにファヴが入ってきた。

「今日は集まってくれてありがとうぼん。今日はみんなに頼みたいことがあるぼん」

「ここで一息つくように間を置き、ファヴは切り出した。

「…ライデンを脱落させて欲しいぼん」

「…え？」

スノーホワイトは呆気に取られた。同じくラ・ピュセルも口を大きく開いて驚いている。

「どういふことよ」

ルーラがファヴを聞いただす。

「そのままの意味だぼん。ライデンは危険だから、このまま魔法少女を続けてしまうのは良くないって結論が出たぼん」

「ま、まっつてよー！」

堪らずスノーホワイトは言う。

「なんで？なんでファヴはそんなこと言うの？危険って何なの？」

「…まあ知らない人からしたら意味が分からないのも仕方ないぼん。でもここのチャットでファヴは今言ってしまったぼん。もう引き返せないぼん。だからみんなにも事実を伝えるぼん」

ファヴの真剣な様子にスノーホワイトもラ・ピュセルも黙るしかなかった。

その時スノーホワイトは気づいた。

このチャットに、ライデンだけ来ていないということ。

チャットの魔法少女達が静かになると、ファヴは重い口を開いた。

「…昨日の夜、脱落者を発表したすぐあとの事だぼん。森の音楽家クラムベリーが、ライデンに殺されたぼん」

## ☆ライデン

「へえ……」

今ライデンは魔法少女が集まっているチャットを見ている。

もちろん、チャットに参加している訳では無い。自分の管理者用端末で覗いているだけだ。

しかし、まさかファヴの狙いは、他の魔法少女を使ってライデンを倒すことなのだろうか？

もしそうならそれはとんだ茶番だ。

ただ犠牲者を増やすだけの愚かしい行為だ。

しかし、今の今まで魔法の国を騙して卑劣な試験を隠してきたあのファヴが、そんな馬鹿なことをするだろうか？

やはり現状ではファヴの思惑は分からない。

とりあえずファヴについては最新の注意を払って行動することにしよう。

本当ならクラムベリーが行った試験について報告したい所だが、ファヴの妨害によりそれは叶わない。

また、他の魔法少女への連絡も妨害されていてできない。この状態では、周りの魔法少女からは自分から連絡を絶っているようにしか思えないだろう。

このままではほかの魔法少女達を手にかけるような事態に陥りかねない。自分の意思とは関係なく、人を殺す。

ライデンは顔を顰めた。

嫌なことを思い出した。

もう二度とあんなことは繰り返さない。

絶対に。

元々ライデンに人殺しに対する忌避感は薄い。

客観的に見て「悪」で、ライデンの中で死んだほうがよくて、殺してもよいと判断した人物なら躊躇無く殺すだろう。

だが、何の罪もない者を殺すのは流石に気が引ける。

罪悪感を少なからず感じるし、そんなことをすれば然るべき罰が自分に下るだろう。

そのため、ライデンは今まで罪のない人や魔法少女を手にかけたことはほとんど無い。

ただ一度だけ例外があるだけだ。



彼女は元々かなり昔の、魔法の国で働いていたエリート魔法少女だった。

仕事は荒事が多かったが、収入は多く、安定した生活を得ていた。

その頃から戦闘狂の片鱗を内に秘めてはいたものの、周りにそれを気づかせるような真似は極力避けていた。

ライデンはその時、安定した生活を求めていたのだった。

ただ、ある魔法少女と出会ってライデンは変わった。

変わった、と言うより、その内にある戦闘狂の素質を開花させていた。

ライデンは、魔王と呼ばれる魔法少女に出会ったのだった。

魔王。パムは一目見てライデンの素質を見抜いた。

またライデンも、パムの強さを初対面ながらも感じていた。

お互いの強さに引かれあつたのかどうか、知る術はないが、とにかくそれから二人は何かと個人的に繋がりを持ち、いつしか唯一無二の親友と化していった。

2人が会うときは決まって試合をした。

戦闘狂同士、これは暗黙の了解のようなものだった。

と言っても、その頃はパムがライデンに稽古を付けるだけの事が多かったが。

2人は似たもの同士で、親友で、好敵手だった。

そして、ライデンの出会いはそのだけではなかった。

2人の実力差が着々と埋まっていった頃、ある別の魔法少女が2人と出会う。

その名はフォルーナ。

彼女は2人が求めているような強さはなかった。

知略に長けているわけでもなかった。

だが彼女は、どこまでも行ってしまう2人を止めるストッパーのような役割として、2人と行動するようになった。

最初は鬱陶しそうに接していたライデンも、天真爛漫なフォルーナとだんだんと打ち解けていった。それはパムも同じであった。

なぜ他に仲のいい魔法少女がいなかった2人がこうもすんなりと打ち解けたのか。

ライデンはフォルーナの魔法のせいだと推測している。

彼女の魔法は「自分が幸せになれる」という魔法だった。

どんな悪意があろうが、どんなアクシデントが起ころうが、彼女の幸せを邪魔することはできない。

その魔法が働いて、2人と仲良くなりたかったフォルーナはそれを叶えられたのだらう。

そうしていつしかフォルーナも、2人と親友の関係を築いていった。

余談だが、本人の知らないところでもライデンは有名になっており、特に魔王塾の塾

生達はみな魔王の好敵手であるライデンに憧れを抱いているようだった。

しかし、それは長くは続かなかった。

ある日彼女ら3人は他愛もない話をしていった。

実は、フォルーナの魔法は絶対的で、彼女は今まで風邪一つひいたことが無く、怪我もかすり傷さえ負ったことがない。

そんな魔法があるからか、彼女は一言、こう言ってしまった。

「もしも誰かに殺されちゃうなら、ライデンとパム以外には考えられないな」

3人にとっては、ちょっととしたブラックジョークだった。

ただ、フォルーナの魔法は、彼女の最高に幸せな人生の終わり方がそれだと認識してしまったのだろう。

数日後彼女は、魔法によって操られたライデンによって殺されてしまった。

犯人はその後すぐさまパムによって始末されたが、ライデンがフォルーナを殺してしまつたという事実は変わらない。

暫くしない内に、ライデンは魔法少女を辞めた。

だが、今ライデンはまた魔法少女となつてここにいる。

あんな事があつても、生来魔法少女の事が好きらしいのか、今自分が魔法少女でいら

れて嬉しく思っているのがとてもわかる。

だがライデンは謝らなければならぬ。

猛反対を押し切りやめてしまい、喧嘩別れとなってしまった魔王パムに。

聞いた中だと、現在も彼女は魔王塾で生徒を鍛えているらしい。

早く彼女に会いたい。

そのために魔法の国にこの試験のことを告発しなければならぬ。

そうするとやはり、ファヴがとても邪魔だ。

管理者用端末でどうにかできないか。

少し試してみようと、彼女が自分の管理者用端末をいじると、ライデンはその異変に

気づいた。

いつの間にか、あらゆる機能が使えなくなっている。これではチャットの中身を見る

ことすらできない。

(失敗した……!)

ファヴに隙をつかれた。気づかないうちに管理者用端末が使えなくなっている。

これを使えなくなるのは正直かなり痛い。

クラムベリーの管理者用端末は回収してはいるが、ファヴによって現在は使えない。

「むむ……」

これでは八方塞がりだ。

「仕方ないか……」

面倒だからやっていなかったが、そうも言ってられなくなった。行動を起こすためにライデンは重い腰をあげた。

—————

☆ルーラ

「はぁ……」

重いための息を吐いたのは、女王様の格好をした魔法少女、ルーラだった。彼女は今、ファヴのせいではかの魔法少女達を敵に回してしまっている。

ライデンに一度協力してしまったのは失敗だったのだろうか。

先ほど終わったチャットでの出来事を思い出す。

「……ていうことで、まあつまり、ライデンは戦闘狂で、強者であるクラムベリーに戦いを挑んでそのまま殺したってことだほん」

「そ、そんな……」

「嘘だろ……」

みんなが呆然としている中、ファヴはあくまで淡々と話す。

「ファヴは嘘なんかつかないぼん。みんな信じて欲しいんだぼん」

「……でも……そんなことって……私たちと会ったときは普通の人だったのに……」

スノーホワイトは未だに信じられない様で、ポツリと呟いた。

「スノーホワイトはライデンに闘う相手として見られてないだけだぼん。彼女のターゲットとして選ばれたら、もう逃げられないぼん。そして闘って死んでしまうんだぼん。クラムベリーや……カラミティ・メアリのように」

「……え？ちよ、ちよつと待ってよ。ねえファヴ、カラミティ・メアリ？」

周りの魔法少女の目には、気のせいなのだろうが、ファヴの体が一瞬止まったように見えた。

（やばいやばい失言だ！）

内心冷や汗塗れのファヴは必死に先ほどの発言を撤回しようとするが、もう遅かった。

魔法少女達は一斉にルーラへ詰問する。

「どういこと？」

「ルーラ達がやったってのは嘘だったの？」

「ライデンと協力してたってことなのか？」

「私たちのことも潰す気なの？」

ピーキーエンジェルズ達はオロオロし、たまはルーラを継るように見つめ、スイムスイムは無表情、そしてルーラは、

「…少し違うわ。カラミティ・メアリの件で私は、ライデンに脅されて協力させられたわ」

「…脅された？」

「本当に？」

「いや、嘘かもしれない。やった事がバレたからライデンを切り捨てたのかも」

「…信じられない」

現在、魔法少女の中に死人が出てしまっている以上、ルーラの事を信用する人はなかないなかった。

ルーラは必死に脅されてやったと周りに主張したが、結局ライデンの仲間という扱いはなかった。

恐らく普段から周りとの交流をしなかったのが仇になったのだろう。

悔しそうにしていたが、どうしようもない。過去は変えられないのだ。

ルーラは仲間の4人と一緒に、逃げるようにログアウトしていった。

「クソ！」

苛立ちから床を蹴ったルーラは、遠くで怯えているたまを呼んだ。

「…あんたが頼めばきつとライデンは私たちに手を出さない。お気に入りの様だしね。今からでも急いで連絡しないと…」

「…え？わ、私たちは助かるの？」

「それがアンタにかかってるって言ってるの！」

「ご、ごめんなさい！」

「全く…」

無能すぎるたまに苛立ちを隠そうともしないルーラ。

ピーキーエンジェルズは慌てて右往左往し、スイムスイムは打開策を考えている。

そのせいか、彼女達には密かに忍び寄る影に全く気づかなかった。

「たまちゃんを虐めるのは許さないぞー」

「な!？」

5人が気づくと、寺の入口にビリビリと電気を纏った魔法少女が立っていた。

彼女は纏っていた電気を消すと、笑みを浮かべて語りかけた。

「さて、時間が無い。単刀直入に言おう」



ルーラは突然の来訪に動揺しながらも、ライデンの余裕に欠けたその表情に危機感を  
感じ、とりあえず頷いた。

「ファヴをどうにかするのには、君たちに協力して貰いたい」

—————

☆スノーホワイト

意味が分からなかった。

スノーホワイトの知っている彼女は、気さくで親しみやすく、少し暴走してしまうが  
根はいい人な先輩魔法少女だった。

しかしファヴが言うには、彼女はもう2人の魔法少女を手にかけて、且つその理由は  
自身の快樂の為だと言う。

スノーホワイトの頭の中はゴチャゴチャだったが、それでも必死にファヴの言ったこ  
とを否定していた。

そんなはずがない。

きつと何かの間違いだ。

多分隣で考え込んでいるラ・ピュセルも、同じ様に考えているだろう。

とにかく一度話し合うべきだ。

面と向かって聞くべきだ。

私の魔法もこういう時には役に立つかもしれない。

スノーホワイトは立ち上がった。

「ラ・ピュセル、私ライデンに会いに行く」

—————

☆リップル

やっぱりライデンは危険なやつだった。

あのカラミティ・メアリの教育係だ。

最初から決まっていたのだ。

そしてそのカラミティ・メア리를倒してしまったほどの、強敵。

カラミティ・メアリは縄張りに入りさえしなければ害は少なかった。

だがライデンは、自発的に魔法少女を、人を殺しているのだ。

いつか自分も殺されてしまうかもしれない。

そうなる前に…殺られる前に、こちらから殺る。

リップルは意を決して立ち上がった。

「おい、急にどうしたんだ？リップル」

「……トツプスピード、私はアイツを殺す」

ライデンを中心として、魔法少女達はそれぞれの意思で行動を開始する。

それは奇しくも、魔法少女同士の殺し合い：クラムベリーの行った試験と酷似していた。

だがそんなことは誰一人気づかない。

ファヴすら気づかないまま、救いようのない殺し合いが始まる。

「ライデン」(雷山桜華)

ライデン  
設定

魔王塾での二つ名「雷神」

・容姿

カミナリ様をモチーフにしているため、ツノが生えている。

自身の後ろには四つの太鼓が浮遊しており、魔法を使う時に使用する。

黄色と黒の虎柄のビキニと羽衣を身につけており、雲でできたスカートを履いている。

・身体能力

破壊力：♥♥♥♥♥

耐久力：♥♥♥♥♥

敏捷性：♥♥♥♥♥

敏捷性がとんでもなく高い。

数値は♥♥♥♥♥と書いてあるが、同じ♥♥♥♥♥であるクラムベリーと比較するに値しないほど速い。

例として、カラミティ・メアリの強化された銃弾を至近距離で回避できるほど。

また元の耐久力も高く、威力の低い攻撃なら魔法なしで耐えてしまう。

破壊力は他と比べるとやや劣るが充分高い。また魔法で使用するバチを武器として

扱えば、破壊力 ♥♥♥♥♥ 相当の攻撃力を得られる。

更に、地上よりは大幅速度が落ちるが飛行可能。

### ・魔法

『それぞれの太鼓で四つの魔法を使うよ』

ポテンシャル：♥♥♥♥♥

無限に生成できる魔法のバチを使って自分の背中にある四つの太鼓を叩くことで、それぞれ決まった魔法を使える。

生成したバチは非常に丈夫なため、前述の通り打撃武器としても使える。

魔法は予め貯めていた電力を消費しなければ使えない。

消費電力の大小は魔法によって四つとも異なり、①から④にかけて増えていく。電力は、コンセントや発電所などの場所で貯めることが出来る。

①見えない電気のバリアで色々なものを防ぐよ

消費電力：小

一度だけライデンを害するあらゆる外的攻撃を防ぐ。

子供とぶつかった程度の衝撃からデイジービームまで、どんな攻撃でも一度だけ防

ぐ。

ただ連続攻撃や、屋内では天井が崩れるなどの事故にも弱い。

バリアを作る時にしか電力を消費しないため気軽に使用でき、使用していれば殆どの奇襲を防ぐことが出来る。

総じて使いやすく便利な魔法。

②特殊な電波で周りの様子が分かるよ

消費電力：中々大

ライデンを中心として、最大で約半径5kmの円内の情報を知ることが出来る。

範囲を絞れば消費電力は減る。

様々な情報がわかるが、それを全て認識することは不可能なので基本的に何か情報を絞る。

例えば、範囲内の魔法少女の情報に絞れば、範囲内のどこにどんな姿の魔法少女がいるか知ることが出来る。

こまめに使うことで奇襲や敵の情報を調べることが容易くなる。

扱うには少し工夫が必要なものの、便利な魔法。

ただ、燃費は悪い。

③電気を自由自在に操るよ

消費電力：中々極大

電気に関してあらゆる事が可能で、雷さえ自由に呼び出せる。

相手との間に障害物がなければ、雷を撃つことで大抵の敵を即死させることができる。

弱い電気を浴びせることで体を麻痺させて行動不能にさせることも可能。

自由自在というだけあって自由度はかなり高く、ライデンが戦闘時に主力としている。また戦闘時以外でも、電子ロックを解除したり電化製品を修理できるなど、汎用性が非常に高い魔法。

ただ、使い方によってはかなり電力を消費するので、便利だが多様は出来ない。

ちなみにライデンの電気には魔法がかかっており、本来電気を通さない物質でも無理矢理電気を通す。

④自分の体を雷に変えられるよ

消費電力：超々極大

ライデンの切り札。自分自身の体を雷に変える。実体がないためあらゆる物理攻撃



は効かず、デイジービームなどの魔法による攻撃も無効。精神系の魔法は辛うじて有効だが、プキンのように発動に接触が必要な場合は無効。

魔法使用中は常に身体に電気を帯びており、本人が許可していない相手が触れると感電する。

更に雷の速度で移動することができるので、瞬間移動の真似事もできる。

強力無比な魔法故に他の三つと比べて消費電力は莫大。ライデンも使用するのには極力控えている。

が、実はライデンは異常なほど電力を有しており、その量は4の魔法を二日間ぶっ通しで使えてしまうほど。使用を控えているのは使ったら闘いが面白くなるからである。

情報を漏らさないために余り使っていないが、やろうと思えば魔王塾生徒達を蹂躪できる。

・性格など

好きなものは強い人、可愛い魔法少女。

嫌いなものは偉そうな人、魔法使い。

知性：♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

常に周りから明るく親しみやすく見えるように演技をしている。

本性は強い相手との闘いを求める戦闘狂。ただしクラムベリーなどとは違い、弱い相手を蹂躪するのは嫌っている。しかしそれは弱い者に優しいわけではなく、演技をして接するものの心の中では見下している。

また、仲間やお気に入りへの魔法少女、友人以外の者には、自身に利益のある場合を除き基本的に興味を示さない。

逆にその他の人には優しく、危険時には様々な手段を使って救出する。

魔王パムとは親友であり、好敵手であった。そのため魔王塾ではNo. 2の座にいた。

ライデンは過去に、とある事件でパムとは別の親友を手にかけてしまい、責任を取ると言って魔法少女を辞めた。その時にパムの猛反対を押し切ったため、喧嘩別れのようになってしまう。

現在ライデンはクラムベリーの試験で魔法少女として復活しており、ファヴをどうにかして試験を中止しようとする行動を始めている。協力者にはルーラー一派を置くようだが……？

自己主張：♥♥♥♥♥

野望／欲望：♥♥♥♥♥♥

ライデンのお気に入りへの魔法少女

たま、スノーホワイト、  
???

## 第七話

☆ラ・ピュセル

ライデンに話に行く。

スノーホワイトにそう言われたラ・ピュセルは、どう返事をしようかとても迷った。確かに一度会ったときの印象とファヴが言う中のライデンはイマイチ噛み合わない。ファヴが嘘を言っている可能性もある。

ただ、もしもファヴが言っていることが本当で、会った途端に襲いかかられたら。その可能性も無くはないのだ。

スノーホワイトは優しい。

だがそれ故の甘さもあるのだとラ・ピュセルは思っている。

情報が足りない現状では会いに行かないのが懸命だとは思う。

ただ、スノーホワイトはそんな言葉では説得できなさそうな雰囲気纏っている。強い意志があるのだ。

「それで、ラ・ピュセルはどうする？」

「私は……」

そうちゃんと呼ばずにラ・ピュセルと呼ぶあたり、スノーホワイトの真剣さが感じられる。

いつまでも待ってもらおう訳にはいかない。

ラ・ピュセルは応えた。

「…うん、私も行こう。ライデンの事は気になるし、スノーホワイトを守らないいけないしね」

私の答えに、スノーホワイトの表情は真剣なまま、笑顔に変わった。

—————

### ☆ライデン

深夜の街を、黄色い魔法少女が疾走している。

今、ライデンは、ルーラー一派が集まる寺に向かっていた。

あれから自分の管理者用端末と、魔法少女になった時の端末を試したが、どちらも使えなくなっていた。

ファヴの仕業だ。

憎たらしいマスコットキャラクターの顔が頭に浮かんだので、それを使って脳内サツ

カーをした。滅、ポン畜。

いや、今はそんな事よりさっさとルーラに協力させなければ。

このまま魔法少女全員を敵に回してしまえば、端末をどうにかするまでに、恐らく大量の犠牲を出す事になってしまう。

ライデンにとって、敵対者を手にかけるのに抵抗など無い。

ただ、そんなことをすれば魔法の国が黙っていない。

勿論報告しなければいいのだが、ファヴはライデンが候補生とクラムベリーを手にかけたことだけを報告するのだろう。

そんなことをすれば、ライデンは即座に試験官を下ろされ、もしかするとあの牢獄行きになるかもしれない。

恐ろしい想像を振り払い急ぐために、4の魔法を使って高速移動する。

ルーラ達の拠点へ到着すると、ルーラがたまを叱っていた。

普段ならルーラをちよつと虐めて楽しむところだが、生憎時間は限られている。

ライデンは4の魔法を解除するのも忘れて話しかけた。

「たまちゃんを虐めるのは許さないぞー」

声をかけると、驚いたようにこちらを見るルーラ。

周りにいたスイムスイム達も気づくのが遅れていた。

気づかないと勝ちよつと警戒心が薄すぎるな…と思索しながら、ライデンはルーラに話しかけた。

「さて、時間が無い。単刀直入に言おう」

流石に唐突過ぎたかと思つたが、ルーラは何となく急いでいる雰囲気を感じたのか、素直に頷いた。

やはり能力は優秀だ。

少し自信過剰な所がネックだが、本当に頭は良いのだろう。

「ファヴをどうにかするの、君たちに協力して貰いたい」

「…ファヴですって？」

「そうだよ。ファヴは私を陥れるために色々やってる様だからね」

そう言いながら4の魔法を切る。

本当はルーラ達に襲われる可能性があるため付けたままの方がいいのだが、ルーラ達の戦闘力は高くない。

たまに引つかかれるか、ルーラに命令でもされない限り大丈夫だろう。

まあ単純に電力が勿体ないというのもあるのだが。

とにかく、まずはルーラ達に現状を理解してもらうために、この試験の真の目的…つまり、クラムベリーとファヴの仕組んだ殺し合いについて、説明することにした。

—————

☆スノーホワイト

ライデンに会いたいという連絡をしようとしたが、ファヴにダメだと断られた。現在ライデンの魔法の端末は使用出来なくしているようだ。

それを聞いたあと、ファヴはこちらに忠告してきた。

「ライデンに関わってもいいことなんか無いぼん。みんなに敵扱いされてもいいのかぼん？ やめといった方がいいぼん」

「それでも一度話し合うべきだよ。他にもシスターナナだつてそう思うはず」

「私もそう思う。確かに危険かもしれないが、スノーホワイトは私が守るさ」

「…どうなつても知らないぼん」

そう言うのとそれつきりファヴは黙り、ライデンの居場所も教えてくれなかった。

そこまで私たちに会わせたくないのか。

怪しい。

スノーホワイトの中でファヴに対する猜疑心が高まっていく中、ライデンがルーラ達



の方に向かったという情報が入った。

情報の出どころは、マジカロイド44という魔法少女で、どうやら彼女もライデンの所へいくつもりだったらしい。

嘘をついている様でもないの、三人は共に向かうことにした。

「アナタ達はファヴの言うことを信用していかないのデスカ？」

「うーん。信用しないというより、信じられなかったというか…」

「つまり、ライデンさんのことを信用している、と」

「まあ…そうだね」

少し照れたのか、困ったようにスノーホワイトは笑った。

するとラ・ピュセルが聞いた。

「君はなんで会いに行くんだ？」

「私デスカ。私はアナタ達のように信用しているとか、そういう訳ではないのデスカ…」

「じゃあ、どうして？」

「…単純に強いからデス。話に行く、というより、敵にならないように交渉する、という感じデスね」

それを聞いたスノーホワイトとラ・ピュセルが、何とも言えない微妙な視線を送るが、マジカロイドは肩をすくめた。

「まあお二人の言いたいことも分かるんデスが、こちらだつてカラミティ・メアリのようにはなりたくないデスし。敵対だけは避けたいんデスよ」

「…でも、それだとライデンがファヴの言う通りの人物でも、味方になるつてこと?」  
「…まあ、そうなりますね」

一瞬ラ・ピュセルが目を細めて剣呑な空気を漂わせるも、おどけたようなマジカロイドの様子に毒気を抜かれ、苦笑いのような顔をした。

「おつと、ライデンがいるのはあそこデスね」

マジカロイドが空気を変えるように呟いた。

彼女が今日使える未来の便利な道具は、探したい人を入力すると、その人の居場所が分かるというもので、便利だが一日限定だと微妙な道具だった。

ただ、今日に限っては都合がよく、丁度これのおかげでライデンの居場所を突き止めることができたのだった。

スノーホワイトとラ・ピュセルの表情に緊張が見えだし、マジカロイドは自分をどう売り込むか、もう一度シュミレーションしだした。

そんなふうには、3人がなかなか寺に向かえないでいると、逆に寺の中から本人がでてきた。

「えーと、私へのお客さん…だよな?」

「どうもお久しぶりデス、ライデ…」

「ライデン！」

マジカロイドがライデンに話しかけようとした時、重ねるようにスノーホワイトが大きな声で呼びかけた。

それに応えるように、ライデンがスノーホワイトの方を向き、話を聞く体勢をとる。

マジカロイドが何か言いたそうな目をしながら、後ろでスノーホワイトを見守るラ・ピュセルの隣へ下がったが、誰も気にもとめなかった。

「貴女が…クラムベリーを自分の快樂のために殺したっていうのは、本当なの…?」

「…は?」

「え?」

意を決したように問いかけたスノーホワイトに対し、ライデンは首を傾げた。それに釣られるように、スノーホワイトまで思わず首を傾げてしまった。

そのまま両者は動かない。

「…何のコントデスか」

ここで思わずツツコミを入れたのは、(・ω・) ショボーンな顔でそれを見ていたマジカロイドだった。

「…ちよつと良く分からないんだけど、何、それ。もしかしてファヴがそんなこと言って

たの?」

「う、うん。そうだけど…。チャット見てないの?」

「ファヴが見してくんないんだよねー。というか魔法の端末が使えないし」

「あ、そういえば…」

ここでスノーホワイトは思い出した。

ファヴは確かに言っていた。

彼女の魔法の端末を使えなくしていると。

だがそれなら、今の反応を見てようやくわかった。

「やっぱり…ライデンはそんな事しないよね」

「…よく分かんないけど、まあとりあえず話を聞こうかな。そっちのマジカロイドちゃん、ラ・ピュセルちゃんからも。後は私からも話すことがあるし」

そうして4人は、そろそろと寺の中に入って行き、勝手に三人を入れたライデンはルーラにグチグチと小言を言われるのだった。

—————

☆ライデン

あ、危ねー。

まさかスノーホワイトがあんなことをドストレートに聞いてくるとは…。

ライデンのぼかんとした様子は、半分は演技ではなかった。

ライデンがクラムベリーを殺したのは、勿論タダの殺し合いである試験を止めさせるため（それも魔法の国に成果を持ち帰るためなのだが）でもあるが、森の音楽家クラムベリーと戦ってみたい、という願望も少なからずあったのだ。

スノーホワイトから案外的を射ていることを聞かれた事自体に動揺し、また、そのお陰で後ろめたい気持ち隠すことができた。

ともかく結果オーライ。

この雰囲気ならスノーホワイト達も仲間になれそうだ。

特に、ライデンはスノーホワイトに目をつけていた。

その純粹さと可愛らしさからお気に入りだったということもあるが、魔法が心を読む類の魔法なので、上手く行けばフアヴをどうにかする方法がわかるかもしれない、とも思っていたため、彼女が仲間になるのはとても有難い。

ライデンは内心ほくそ笑みながら、スノーホワイトに心を読まれないよう必死に、スノーホワイトに勘違いされたら困る、と思うようにしていた。

だからだろうか。

瞳に怪しい光を持った、スイムスイムに気づかなかったのは。

## 第八話

☆  
???

赤い。

見えるもの全てが赤い。

壁も、床も、天井も、自分自身でさえ真っ赤だった。

何の色かは分かっている。

原因が自分だということも分かっている。

分かっている、それでも???は思ってしまった。

なんでこんなことになってしまったのだろうか?と。

――

☆ルーラ

いきなりだった。

ライデンがこちらにもたらした情報は、衝撃的だった。

全てはファヴの陰謀で、森の音楽家クラムベリーの協力のもと、魔法少女を集めて殺し合いをさせていたというのだ。

荒唐無稽な話で、その証人の片割れであるクラムベリーは、既にライデンによって亡き者とされている。

流石にルーラも信じられず、その事をライデンに伝えたが、ライデンは「信じないならそれでもいいけど、たまちゃん以外は何があっても知らない」と言ってくる。

今のルーラ陣営がライデンと敵対などしたら、それこそ目も当てられないことになる。

渋々ながら信じることにして、結果ルーラ陣営はそれを事実として受け止めることになった。

ただ、ルーラも正直その話を信じたわけではない。

ライデンの言っていた事が事実だろうがそうでなからうが関係ない。

ライデンがこちらと協力者である間は、少なくともライデンとの敵対は避けられ、上手くいけば保護してもらえるかもしれない。

ルーラは認めていた。

ライデンには勝てない。

カラミティ・メアリを圧倒する実力者相手に、どうしろと言うのだ。

ルーラの魔法は当たれば最強だが、ライデンに当てるなど天地がひっくり返っても出ないだろう。



それくらいルーラの中で、ライデンは圧倒的強者として存在していた。

いや、もしかしたら、スイムスイム達を盾として使うのなら、奇襲すればもしかしたら成功するかもしれない。

しかしそんな事試すことなど出来ない。

失敗は即ち死を意味するのだから。

他人に守ってもらうのは不本意ではあるが、仕方ないのだ。

そうしてルーラは自身を納得させ、ライデンの庇護下に入ることを了承した。

ピーキーエンジェルズは文句を言っていたが無視した。

こつちも色々考えて決定を出しているというのに、これだから無能共は。

その点たまとスイムスイムは静かだからマシだろう。

まあ結局は役立たずなのだ。

そしてその時、ルーラはふとスイムスイムの方を見た。

そして、その瞬間、ルーラの背筋が凍った。

スイムスイムはルーラを見ている。明らかにこちらに目を向けている。

しかし、その目には何も映っていない。

いや、実際には映ってはいるのだが、全くそれを見ていない。

映っているものに対して、欠片の興味もない。

気に止める必要などない。

その目はそう言っていた。

さらにその目は、暗にこう言っているようにも見えた。

もういらぬ、と。

その目に映っている、リーダーであるはずのルーラは、もういらぬ、と。

まるで、期待して回した福引で出てきた、ハズレのティツシユに向けるような目だった。

失望。

それを極限まで濃くしたような、そんな感情が見えた。

ルーラは目の前のライデンが訝しむものにも気付かず、スイムスイムのその目に恐怖していた。

殺される？

いや…捨てられる？

私は…どうなる？

「おーい。ルーラちゃん？しつかりしろー」

「…あ、…コホン。悪いわね。少しぼうつとしてみたい」

「そりゃ珍しいね……ん？」

誤魔化すようなルーラにライデンが首をかしげながら、定期的に叩いていた太鼓を叩くと、突然ライデンが何かに気付いたように後ろを見た。

「…何、敵？」

「分からない…けど、そうじゃ無さそう。スノーホワイトちゃんと、ラ・ピュセルちゃんと、あれは…マジカロイドちゃんか」

どうして敵じゃないと言えるのか聞きたいが、ここは別のことを聞くべきだろう。

「…なんであいつらこの場所が分かったの？貴女誰かに教えた？」

「そんなことする理由が無いでしょうが。なんかマジカロイドがなんか道具持ってるし、それじゃない？」

「道具？何よそれ知らな」

「ちよつと見てくるねー。すぐ戻るから」

「え、ちよ」

すると、ライデンはルーラの制止を振り切り寺の外へ出ていった。

ルーラがその自由さに苛立っていると、ピーキーエンジェルズが騒ぎ出した。

「あーあ。あの人マジで何なのかね。怖すぎだわー。もう今のうちにサククリやつちやわない？」

「それだよそれ、お姉ちゃんマジクール。あんなの味方とか刺されそうだわー」

「それな」

「お前ら……」

ルーラは二人に怒鳴りつけようとした。

今そんなことをしても絶対に成功しない。

ルーラが様子を見て隙があれば魔法を使い、無ければ無いで保護してもらえばいい。

だが、そう言おうとしてハッと気がつく。

スイムスイムの前で守ってもらおうというのは危険だ。

タダでさえ身の危険を感じる今、これ以上評価を下げたらどうなるか分かったもので

はない。

スイムスイムの顔色を窺っている自分にどうしようもない苛立ちを感じるが、仕方ないのだ。

ルーラは自分を納得させた。

先程から、自分が抵抗もなく人の下に入っていることに何の疑問も抱かず。

—————

☆スイムスイム

スイムスイムは、今表情に感情を見せないよう限界まで努力をしていた。  
スイムスイムは見てしまったのだ。

ライデンに弱気になっているルーラを。

カラムティ・メアリに対しては、敵意はあったがいつか倒すという、下に見られることに強い怒りを感じていた。

だが、さっきのルーラは違う。

ライデンに憤るところか、保護してもらえぬのを安心している節すらあった。

何度も見間違いだと思ったが、スイムスイムは記憶には自信がある。

見間違いではないのだろう。

ああ、とスイムスイムは理解した。

ルーラはもはや『ルーラ』ではない。

スイムスイムが憧れたお姫様であるルーラは、もういないのだ。

そこにあるのはタダの抜け殻。

そう思った途端、吐き気がした。

どうしようも無く気持ち悪い。

吐いてしまえばどんなに楽か。

だが、だめだ。

スイムスイムは決めたのだ。

自分自身が、ルーラになると。

そのためには、こんな所で痴態を見せるわけにはいかない。

ルーラなら、『本物のルーラ』ならそう言うだろう。

吐き気を堪えながら、寺に先程感知した三人を入れようとするライデンに小言を言う

ルーラを、スイムスイムは見つめていた。

本来のルーラなら怒鳴り散らすはずだ。

やはり、違う。

もうあれは、ルーラじゃない。

そして、ルーラは一人で充分だし、抜け殻など邪魔なだけだ。

スイムスイムはルーラを強く見据えながら、ルーラなら今からどんな行動を起こすか

悩み始めた。

—————

☆スノーホワイト

寺には五人もの魔法少女がいた。

もちろん、チャットからある程度の情報は聞いている。

ルーラ陣営の魔法少女達だ。

ルーラはこちらを睨んでおり、スイムスイムとミナエルとユナエルはこちらを見てすらない。

たまは一度目が合ったが、怯えるように物陰に隠れてしまった。

この中では仲良くなれそうだと思っていたのに…。

と、スノーホワイトが人知れずシヨンポリとしていると、物陰からたまがこちらを覗いていた。

そのたまから、心の声が聞こえてきた。

(うう…、三人とも怖い…、でも白い魔法少女の子は優しそうだったのに隠れちゃった…。怒ってるのかな…、謝った方がいいのかな…どうしよう)

チラチラとこちらを覗きながら、そんなことを考えているたまだったが、スノーホワイトには丸聞こえで、そんなたまを微笑ましく思い、つい顔を綻ばせてしまった。

すると、たまもこちらの表情が柔らかいことに気づいたのか、恐る恐るこちらへにじり寄る。

それを迎えるように、スノーホワイトも少しずつたまの方へ近づく。

お互い無言で会話をしながら近づきあっていると、それを見て不思議に思ったラ・

ピュセルが声をかけた。

「…何やってるんだ？」

「ツツ！」

「あ……」

すると、突然声をかけられて驚いたのか、たまはまた物陰に隠れてしまった。

「…え、ちよつと何だよスノーホワイト。な、なんでこつち睨むのさ。…え、ちよつ、何？え、わ、私が悪いのか？…わ、分かったから。そんなに睨まないでよ…」

じとーつと、スノーホワイトがラ・ピュセルになんとも言えない視線を送っていると、流石に居心地が悪かったのか、ラ・ピュセルはたまの方へ謝りに行った。

—————

☆ラ・ピュセル

なぜかたまに謝れと、スノーホワイトに言われている気がした。

気がしたただけなのでしなくてもいいはだが、スノーホワイトのこの視線を長時間受けるのは辛い。

そう判断したラ・ピュセルは、素直に謝ることにした。



できるだけ驚かせないよう、ラ・ピユセルはたまに近づいた。  
相変わらずたまはビクビクしている。

「…えーつと」

「ビクッ?!…」

ビクビクしながら聴く体制を取ったたまに、ラ・ピユセルが話しかける。

「そ、その…すまなかった」

「…、ー、ー、）チラッ」

ラ・ピユセルのハートに100のダメージ。

「(何この可愛い生き物) …私も、悪気は、なかったんだ…」

「…、ー、ー、）ウンウン」

ラ・ピユセルのハートに80のダメージ。ラ・ピユセルは瀕死だ。

「(え、待つてなんでこんなに可愛いのも頭撫でたい)…ハッ…コホン、その、ほら、…  
と、友達に、ならない?…私と」

「. \* . . ( \* . √ . \* ) . . \* . ??」

ラ・ピユセルのハートに500のダメージ。ラ・ピユセルは墮ちた。

「(うんよし) 結婚しようこっちおいで」

「え」

「\*、ー、( )、ω、( ) スリスリ」

たまは女神のような表情を浮かべるラ・ピュセルに安心しきっている。ラ・ピュセルは放っておけばそのまま昇天しそうだった。

というか半分していた。

(はあ…もうこのまま死んでもいいかもしれない…)

「ちよつと待つ」「ちよつと待った!!」

流石に止めようと声をかけようとしたスノーホワイトだったが、ライデンがそこに割って入った。

「私にNTRの属性は無いんだぞー。ということではたまちゃんを寝盗られるわけにはいかない!」

「そんなことどうでもいい。この娘が安全に暮らせる環境を整える。それが第一だろう」

「概ね同意だけでも良くない。ちよつといい加減離れろ」

ライデンとラ・ピュセルの間でバチバチと目線がぶつかる。

さらにライデンが太鼓を叩き、電気を体に纏う…ように見えたが、纏ったビリビリに怯えたたまを見て慌てて魔法を解除した。

その時ルーラがライデンに話の続きを求めた。

マジカロイド44と、これからについて話し合っている途中なのだ。

「ちよつとライデン。まだ話は終わって…」

「ラ・ピュセル？その子はそこにいると危険よ。早く手放しなさい」

「貴女のビリビリの方がよっぽど危険に見えますが？」

聞いちゃいねえ、というルーラの愚痴もライデンには聞こえていない。

周りで、スノーホワイトはラ・ピュセルをあんなにまで魅了するたまに戦慄しており、ピーキーエンジェルズは面白そうだからと見物。

スイムスイムは、たまのその魅了の力を何かに生かせないか検討しており、マジカロイドは欠伸をしながら見物していた。

誰も真剣な雰囲気を纏っていない。

ルーラは思いつきりため息をつくとき、ラ・ピュセルとライデンの決闘が終わるのを待ちながらこれからの事を考えだした。

この時はまだ、誰も知らなかった。

こんな平和な日々が続く期間は、もうほとんど残っていないと。

## 第九話

☆ルーラ

あれから何とか、本当に苦勞して場を収め、話を始めることに成功した。

どうやったたら話し合いを始める行為に、こんなに疲れさせられるのだろうか。やはりライデンはおかしい。

「んー？ルーラちゃん何か失礼なこと考えてない？」

「…考えてないわよ」

おかしい上に意外と鋭いのだから夕チが悪い。

「それで、その二人はもういい？」

「はい…すみません…」

「い、いやいや、私が悪かったんだ。だから、スノーホワイトが謝る必要はないさ」

「……ツーン」

「うっ…」

スノーホワイトはラ・ピュセルに少しご立腹らしい。

まだ引きずってるのかこいつらは。

…ホントに追い出した方がいいか？

「まあまあそう怒らずに。それじゃ、マジカロイドちゃんはさつき聞いたから、次はスノーホワイト。さつきも聞いたけど、貴女はなんのためにここに来たの？」

「私は…ファヴが言っていたことか信じられなくて、ライデンに直接会いたかったから。こつちももう一度聞くけど、ライデンは、自分の快樂の為に、カラミティ・メアリと森の音楽家クラムベリーを倒したの？」

「違うよ？」

ルーラが、カラミティ・メアリはくたばってくれて感謝してる人も多そうだなー、ついでにライデンもくたばらないかなーなどと思っていると、ライデンがこちらを向きニッコリした。

…本当に読心の魔法でもあるのだろうか？

「そっかあ…」

「…まあでも私が手にかけてのは事実だよ」

「……え!？」

ライデンはここで、カラミティ・メアリに脅迫状を送られてきたことや、森の音楽家クラムベリーとファヴについて、ひと通り説明した。

「嘘だろ…」

「フアヴがそんなことを…」

スノーホワイトもラ・ピュセルも信じられないと言った様子だ。かく言うルーラもまだ半信半疑ではあるのだが。

「まあルーラちゃんもだけど、流石に鵜呑みにはできないよね。…そこで、さつき思いついたんだけど、過去にクラムベリーとの会話を一度だけ録音した物が残ってた気がするんだよねー」

「ホント!?!」

「うん。でも場所遠いからそれは後ね」

「え?後なの?さつきと取ってきてちょうだいよ」

「まあまあ、ラ・ピュセルの話聞いてからね?それで…」

「ちよつと待って」

とここで口を挟んだのは、スイムスイムだった。

ルーラの鼓動が早くなった。

「何かな?」

「ラ・ピュセルに聞く。今から話す話は私達も聞かなきゃダメ?」

「いや、そんなことはないが」

不思議そうな表情でラ・ピュセルが応える。

するとスイムスイムは立ち上がると、寺の奥に…。

「それじゃあ私は…」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。どこへ行くんだ？」

よくぞ聞いたと、ラ・ピュセルに対してルーラは頷いた。

話を聞く必要がないからと言ってどこかへ行くのは怪しい。

何を企んでいる？

「言わなきゃダメ？」

「あ、ああ。今は少しでもバラバラになる行動は避けるべきだろう。それでも離れるのなら、理由を述べてから離れることにした方が…」

「トイレ」

「…え？」

は？

「トイレ」

…これは自分で聞かなくてよかった。

「……す、すまない！いや、悪気があったわけじゃ…」

「スイムちゃん、行っちゃっていいよ」

「うん」

そのままスイムスイムは何事も無かったかのようにお手洗いに向かった。

「……ラーピユセルちゃん？」

「は、はい」

「今のはダメだねー。乙女に恥かかせるなんて万死に値するのだよ」

「ごめんなさい……」

「そうちゃん……」

「……ごめんなさい……」

ラ・ピユセルは涙目になりながら謝っており、ルーラも思わず同情してしまうほどだった。

「……まあ、よし。そんなこともあるか。それでラ・ピユセル、貴女はなんのためにここに来たの？」

「私は……ライデンが、ファヴから聞いたとおりの魔法少女なら戦いに。そうでないなら話し合いに。そういう覚悟できた」

それを聞いたルーラはギョツとした。

ライデンと、戦う覚悟と言ったか？

それは……流石に無謀だろう。

ルーラは頭の中で、ラ・ピユセルの評価を下げた。



…無意識下では、自分が屈した相手に勇敢に立ち向かう姿へ、嫉妬していることにルーラは気づかない。

「なるほど。…それで?どうだったの?」

「今こうして話し合ってるのが答えさ」

爽やかに笑ってラ・ピュセルが答える。

カッコつけてるけどさつき涙目だっただろ。

「…オーケー理解した。まあ誤解が解けたのはコチラとしても嬉しいよ、うん。さて、じゃあ取りに行くか」

ラ・ピュセルとの話が終わり、ライデンは立ち上がる。

その横顔が少し嬉しそうに見えたのは、恐らくルーラの気のせいだろう。

「帰ってくるのにそんなに時間はかけないから、まあその間は君たちで親睦を深めててね。喧嘩とかダメよ?」

「さっさと行かんか」

「最近ルーラちゃんが冷たい件」

そう言い残し、飛び立っていったライデン。

言い残す言葉にもイライラさせられるとは、流石ライデン。

墜落しろと念じながら、そういえばスイムスイムはまだかとトイレの方に目を向け

た。

「ルーラ、あたしらは何しとけばいいの？」

「ひまー」

「後に：いや、まあその三人と適当に話でもしてたら？」

「オーケー」

後にしろと言おうと思ったが、恐らく仲間にはならずとも味方になる者と話をするのはいい事だろう。

まあバカはバカと話しておけばいいのだ。

双子天使がマジカロイドに絡みに行っている間にルーラは、なかなか帰ってこないスィムスィムが向かった扉へと歩き出した。

—————

☆ライデン

屋根から屋根へと飛んでいく。

ライデンは持ち前の素早さを生かして、自分の担当区域へと急いでいた。会話を録音したのは、クラムベリーと出会って間もない頃だった。

クラムベリーが行っている残酷な試験を知り、それを告発する事で早急にパムに会えるのではないかと思つたためだ。

しかし、クラムベリーは魔王塾の生徒だ。

クラムベリーその悪事の深刻さから、魔王にも責任が問われる可能性もある。

ライデンが魔法の国に告発するのを避けていた最大の理由がそれだ。

しかし、ファヴにより端末が使えなくなったため、告発する手段が無くなった。

どう考えてもライデンの失態だ。

これから犠牲者が出るのは避けなければならない。

管理者用端末を破壊できるものさえあれば、ファヴを始末して、普通の端末から連絡することはできるが、自分のバチでは少し威力に欠けるし、魔法では端末は壊せないようになっている。

何か魔法の国のアイテムが手に入れば別なのだが…。

そんなことを考えていると、ようやくライデンの住んでいるアパートに到着した。

自分の住処がバレてないか確認するために反射的に2の魔法を使い、魔法少女反応があつたことに驚いた。

録音したものを取り出す前に、そちらを片付けよう。

魔法少女反応がある方を見ると、二人の魔法少女がいた。

ライデンもその二人は知っている。  
コンビを組んでいる二人だ。

さてどう説得しようかと悩みながら、ライデンは二人に歩み寄っていった。

—————

☆ヴェス・ウインタープリズン

亜州雫は自分を、一般的に見ても善人とは呼べないと自覚している。

今まで同性とも異性とも付き合ってきたが、長続きしないのはそのせいだ。

人の役に立つことにそこまで価値も感じない。喜びも感じない。

と言っても悪人だとも思っていないのだが。

そんな雫でも、羽二重奈々：シスターナナだけは別だ。

彼女は何物にも変えがたい存在で、どんな手段を用いても守り抜く。

彼女の笑顔を見ることには最高の価値があり、最高の喜びを感じる。

雫：ウインタープリズンにとって、シスターナナは己にとつての全てだった。

シスターナナは博愛の心を持ち、平和を望んでいる。

そのため困った人を助けると喜ぶ。

それが理由でウインタープリズンは魔法少女として一般人を助けている。もし一人だったなら、あまりこういうことは自発的にしなかつただろう。

そんなシスターナナは、危険因子ライデンによって心を乱していた。

自身の快樂のために魔法少女を手にかける。

そんな魔法少女がいるとファヴが言った時、ウインタープリズンは驚き、シスターナナは震えた。

シスターナナが悲しんでいる。

それはつまり、ウインタープリズンがライデンを許す理由など皆無ということだ。

今隣にいるシスターナナは、ライデンと話すためにライデンの担当地区へ向かっているが、ウインタープリズンは出会った瞬間に攻撃できるよう身構えながら歩いていた。

そして担当地区に入ってしまったらしくすると、ライデンを発見することが出来た。

そして向かい合うように立っているのは、忍者の格好をした魔法少女と、箒に乗った魔法少女。

確か、リップルとトップスピードという名だったはずだ。

ウインタープリズンは、その二組に何か剣呑な空気を感じ取り、近づこうとするシスターナナを手で止めて、近くの柱に隠れて様子を窺うことにした。

そして、ライデンが手を上げて何か押し止めるような、どうどうとジェスチャーをす

ると、リップルが突然手裏剣を投げた。

ライデンはどこからともなく取り出したバチで防ぎ、トップスピードがリップルの頭を叩いた。

「何してんだお前！向こうは話を聞く態度だっただろうが！」

「…でも…アイツは危険だから…」

「俺には今のお前の方がよっぽど危険に見えるけどな！」

リップルは言い返してはいるが、思ったよりトップスピードの声が真剣だったのか、少しバツが悪そうな顔をしており、何度か舌打ちをしていたが音は小さかった。

ライデンは離れた所でそれを見ていたかと思うと、自然な動作でバチを太鼓に叩きつけた。

そして次の瞬間。

ウインタープリズンとライデンの目が合った。

反射的に隠れそうになったが、ここでシスターナナが前に出てしまった。

「覗くような真似をしてしまいすみません。なかなか割って入るような雰囲気では無かったもので…」

「…ああ、別にこっちは怒ったりはしてないよー。それで、何か用？」

「いえ、ライデンがファヴの言っていた通りの人なら、一度話し合いをした方がいいと思

いまして」

？「あーまあそうだね。そう思うのも無理はないよ。ファヴ結構酷いこと言ったら  
しいしね」

うんうんと頷きながら応えているが、その様子だとファヴが言うほどの人物ではない  
様だ。

「リップルちゃん達にも色々説明したいんだけどね、今ちよつと用事があるの。スノー  
ホワイト達のところに行かないといけないから、明日詳しく話し合わない？」

そう言つて、リップルとトツプスピードと、シスターナナに向かつて問いかけた。

「私は構いませんよ」

「俺もいいぜ。リップルもいいよな」

「……チツ」

「よし、こつちはオーケーだぜ！」

今のどこがオーケーなのかウィンタープリズンにはさっぱり分からなかったが、ライ  
デンは了解とばかりに敬礼の動作をとると、「また会おう！」と言つてそのまま駆け出し  
て行つた。

少し頭がおかしいのだろうかと思つて納得し、ウィンタープリズンはシスターナナに歩み寄つ  
た。

「ナナ、今日はもう帰ろう。明日またライデンと会って話せばいいさ」  
「そうですね。では、お二人共お気を付けて」

シスターナナは二人にお辞儀をして、ウインタープリズンと共に帰路についた。後ろで舌打ちが聞こえた気がしたが、気のせいだと気にしないことにした。

—————

### ☆ライデン

「めんどくせー」

周囲に誰もいなくなったのをいい事に、ライデンは独りで愚痴をこぼしていた。

ライデンはシスターナナとウインタープリズンの事が苦手だった。

あの博愛主義にもイライラするが、あれは根本的な部分で歪んでいるのだと、ライデンは心の中で二人を評していた。

シスターナナのあの博愛は、どうもライデンが普段から明るく振舞っているように、自らの本心ではないような気がしてならない。

だからと言って、別に好きな相手の前でいい子ぶっている訳でもないのだ。

ただ、シスターナナの内面には、ドロドロとした歪んだ本性が隠れているようで、ラ



イデンは彼女を不気味がっていた。

そして、当然ウインタープリズンはその歪みを知っているのだろう。何せほとんど関わりがなかったライデンですらその気がついたのだから、いつでもどこでも一緒にいる彼女が気づかないはずがない。

そして気づいている上で、あのような付き合いを続けているのだから充分おかしい。ウインタープリズンにも、シスターナナとはまた違った歪みがありそうだと、今でもライデンは感じている。

そんな嫌いな二人が隠れてこちらを見ていることを知った時、ライデンは咄嗟にそこらへを向いてしまった。

リップルもトップスピードもいい子だと思うが、あの二人は違う。

ライデンにとつては、カラミティ・メアリのように殲滅対象ではないにしても、あまり関わりたくない相手だった。そんな相手に覗かれていると分かれば、動揺するのも仕方なかったと言えよう。

とりあえず録音を理由に逃げ出せたが、明日をすっぽかしてしまうとウインタープリズンが襲ってきそうまで面倒だ。

無論ライデンにとつては撃退など容易いが、リップル達への印象もある。

明日は遅刻しないよう気をつけよう、などと考えながら、ライデンは自分のアパート

から録音テープを取り出し、試しに聞いた。

きちんと聴けるようだ。

よし、とライデンはそれを持ち上げ、ついでに消費した電力の充電も行った。

ライデンの魔法は電力を消費しなければ使えないため、こまめな充電は大切だ。

とは言ってもライデンは現在学校にも通わず働いてもいない。いわゆるニートだ。

時間は余るほどあるので、一日中家で充電することも珍しくない。

そのため、ライデンの電力は常にたつぷりある。

それでも、少しでも無いに越した事はない。

ライデンは太ももの部分に巻き付けているプラグとコードを出し、家のコンセントに

刺した。

数分後、多少の充電が終わり、ライデンは録音テープを持って、ルーラ達の寺へ駆け

出した。

魔法少女の中でも屈指のスピードを誇るライデンが本気で走れば、一つの街程度なら

直ぐに通り返る。

暫くしないうちにルーラの寺が見え始めたが、寺で少しアクシデントが起こっている

ようで、ライデンはため息をついた。

ルーラの寺では、ライデンがいなくなつて様々な事があつたのだろう。

仲良くしてと言ったはずなのだ。

恐らくスイムスイムあたりがこんな惨状を作り出したのだらうか。

ひとまずたまやスノーホワイトの安否を確かめるため、ライデンは激しく燃え盛る寺へと足を踏み出した。